寅年に因んで

老人介護保健施設 いしがき太陽の里
伊藤　敏明

7回目の寅年を迎えると丁度生れ年85才になるわけです。80才を越えれば長生きと云われて、死んでも紅白の餅をついてお祝いすると云う所もある相です。

私は石垣に来て丁度6年になりますが、ここは80才は未だ若いと云われて驚きました。なるほど90才から100才と大層長生きしてしかも元気にしている様です。

その様な事に刺激されたのか、77才の年でここに来て若返りした様な気持ちになり今迄ここの職場で働く事が出来ました。

前の所に居れば週2～3回の出勤の窓際族か一日中、家でボンヤリ過して加齢速度を早めていたと思われます。

私は小児科医を専門にしていたが5回目の寅年の60才の時定年退職し、その後8年余り保健所長を勤めました。

その時、医師は臨床のみでなく予防医学の大切を覚えました。老健に勤めて特に予防医学の大切さを痛感しています。寝たきりになる原因は御承知の様に脳梗塞、大腿骨頚部骨折、糖尿病で認知症も加えてよいかと思います。この素因はメタボリック症候群です。これは昔から云われている養生を怠った結果です。本当に長生きの時代になったので養生の大切さを肝に銘じます。

寅年で心に残るのは戦時中の千人針の事です。出征する兵士に身に付けてもらう腹巻きです。これは千人の女性が1針づつ赤い糸で1つづつ縫いつけるものです。この時代お上は死んでお国に忠義をつくすのだと、生きて還ると決して思うなよ、死んで護国の神となれと教え込んでいた時代ですが、母や妻、娘の願いは生きて還ってくること念願して黙々と千人針のため街角に立って1針づつ縫ってもらっていたのです。お上はこれは禁止しなかった様です。寅年以外の人は1人1針ですが、寅年生まれの女性は年の数だけ縫う事が出来たのです。これは虎は1日で千里往って千里還るたとえがあるので、それにあやかって生還を心から望む心情のしるしと思われます。私の母は寅年だったので重宝かられて沢山縫っていた様に覚えています。こんな願いも当時の戦争指導者は意に介さず玉砕戦法肉弾戦自爆など生命を紙くずの様に捨てる戦を強く求めています。又国民も黙って身を投げ出していました。

しかし本当は千縫針にこめられたものが心の中で叫ばれていたと思います。母の願いも空しく兄はビルマのインパール戦で戦死しました。

政権交代して初めての年です。以前の日本より国民の生活を大切にする時代が来ることを新年に当り心から希望しています。

初　夢

稲福　全三

「寅」は百獣の王ライオンと並んで強い動物です。今年は寅年にあたりますのでその強さに肖って、プライマリケア医のスキルアップに努めたいと思います。先人達の言によりますと

1）病気があって医学が生まれ、病人の為に医療がある、病人がいて医師がいる決してその逆であってはならない。医療は公共性の高い仕事であり、医療資源は公共の資源である、公平に、適正に、人、金を配置すべきである。（大島伸一先生）

2）病人を生物学的に診るだけでなく、社会生活をしている人間として診る「人間の医学」を育て、病人を全人的、総合的に診ることは

プライマリケアの基本であり、大きい柱である、医療のための学会、病人と人間の安全のための学会であるべきである（永井友三郎先生）

3）「プライマリケア医の課題」として、1.日常病の診療、2.医療相談、紹介、連携、3.専門医療の補完、4.在宅重視の高齢者、障害者の地域ケア（在宅医療）、5.地域作りを基盤とした予防活動等があげられます。（前沢政次先生）

4）医学の進歩は、1.予防医学、2.治療医学、3.延命医学の三つに分類される。1がかなえられなくとも、2の治療医学で人の健康を元に戻すことはしばしばである。しかし成人病の多くは治癒は望めなくとも、悪化をおくらせ、延命処置で死期を先に追いやることは可能であることが多い。血液透析、心臓ペースメーカー、臓器移植などはその最たるものである、今までの医学は人間全体の命よりも体の病気を中心に扱い、病んでいても、生きている間の命の質又は生活の質をできる限り豊かにすることを考えなかった。この「QOL」を高める第四の医学がやっと今日出現してきたのである。（日野原重明先生）

上記の1）、2）、3）、4）の先人達の言を踏まえながら地域住民の保健、医療、福祉に関わる総合的なニーズに答えられる様にプライマリケアのスキルアップに努め、且つ専門医に送るべき適切な臨床判断ができる能力を涵養し、紹介のタイミングを的確に判断できるようにトレーニングする、下記の七つのカテゴリー、1.医療専門職としての使命、2.全人的視点、3.医療の制度、管理、4.予防、保健、5.地域医療、福祉、6.臨床問題への対応、7.継続的ケア、以上のカテゴリーを講義、実習を通じてマスターする必要があります。プライマリケア医の資質向上のため沖縄県プライマリケア研究会を発足させ、90名余の先生方が入会され、去年の8月8日に県医師会会館で創立総会が行われました。未入会の先生方には是非ご入会頂き、共に切磋琢磨してプライマリケアの臨床能力の向上に努めて頂きたいと思います。

沖縄県プライマリケア研究会と日本プライマリケア学会九州支部が共同主催で、今年の2月13日、14日の二日間に亘って、第5回日本プライマリケア学会九州支部総会・講習会が県医師会館で開催されます。

多くの先生方のご参加を歓迎申し上げます。これを契機に、デモクラシーに徹して議論し、地域住民に売れる医療を準備し、提供すれば、患者は安心、安全の医療が受けられ、納得し、「有難う」と感謝される状況がかもし出されます。その結果として障害のない高齢社会が構築され且つ沖縄県が世界一長寿地域が維持できれば、沖縄から世界へ、核のない平和宣言のエールが送れる今年の初夢が現実のものとなるように頑張りたいと思います。一羽の蝶の羽ばたきのエネルギーは微少で微風であるがそれが共振し合って次から次へと渦を巻き起こし予期してなかった大きなハリケーン並みのエネルギーに成長する、プライマリケアの必要性に気がつき、行動し、共鳴、誘発、爆発への良循環の元にプライマリケアのスキルアップにつとめましょう。

幼い頃の老虎

友寄　成

私は大正15年5月22日の寅年生れ、今年で85才の寅年を迎える。幼寅の時は手に負えないウーマクワラバーであった。近所に同じ歳の政ちゃん（高原景政君）、タケ坊（浜田多計裕君）がいて遊び所は屋根の上互に行ったり来たり、又桑の実（ナンデンシー）を口辺りを紫に染めながら食べていた。或る日2階の高窓から小便をした所、丁度真下を歩いていた政ちゃんの頭にかけて政ちゃんのおばあさんにどなり込

まれた時もあった。又オナラを瓶につめて「上等の香水だからかいでごらん」とシムぬアンマーにかがせてブチクンにしてみたり、新生堂書店（毎月少年倶楽部をとっていた）の娘さん（後に兄嫁となるが）に「成ちゃん何年生になったね」と声かけられて「ワーガシッチョーミ、シンシーカイチチミシレ」と答える等ヤナワラバーの最たる者であった。近所の映画館もフリーパス。母から入れてくれるなと頼まれたそうだが、それも無視して入り続けた。映画俳優の名前は殆ど暗ずる事が出来た。その頃出現したアイスケーキ、その作り方を覚えようと半時も丹下商店の機械の窓にこびりついていた。小學生にあがっても木から落ちたり、砂地で砂をかぶさせられたり、先生から注意を受けない日は１日とてなかった。

それが突然人が変わった様におとなしくなったのは沖縄県立第二中學校に入學してからである。上級生の５年に西銘順次さんがおられた。品行方正、真面目一筋、學校の規則は１度も破らず卒業迄５年間あの有名な二中のあんもちの味も知らぬ程馬鹿正直となっていた。

その後高校、大学での医局生活、公務員、開業医と続くが思ひ出も途切れ途切れ頭は退化し、記憶もさだかでもない。正月といふのに夢もなく、只ばく然と生きている老虎のこの頃である。

期待せざれば失望なし

宮良眼科医院
宮良　長和

文明の飛躍的進歩にも拘わらず、この世界の現状はどうか。最近はインフルエンザで大騒ぎしている。いくらそれから逃げ回った処で逃げおおせる訳には行くまい。石垣では感染防止の為にラジオ体操禁止まであった。早寝早起きラジオ体操で身体を鍛えようとは考えずにウイルスから逃げ回る事ばかり考えている。大騒ぎしなければならないのは人間がそれだけ弱くなったからである。物質文明の発達で身体を動かす事を忘れ、更に不自然な食品、公害、排気ガス等で肉体がぼろぼろになってしまったからだろう。外敵に対して弱くなっただけではない、糖尿病が予備軍を含めると何千万にも達するとの事。もう滅びるのではないか。

少し暑ければ冷房、寒ければ暖房。それほど暑くもないそれに日向でもない、涼しい部屋の中に居ながら、冷房を入れてくれと請求する患者もいる。誰がそんな事を言っているか、先ず行って顔を見てから入れると、放置しておく場合もある。

テレビは点けっぱなし。昔テレビが出始めた頃大宅壮一が、これで一億総白痴になると言ったが、そろそろそうなりかけているのではないか。小学生の孫はインフルエンザで学校を休み頭が痛いと横になって居ながら横目ではテレビを見ている。大体親も傍で一緒に見ているのだから祖父の出番はない。

巷には不健康な飲み物食べ物何でも売っている。買い物、出勤には車、畑は耕耘機、草は草刈り機。それもこれも大量生産大量販売大量消費の資本主義経済が元凶である。そうかと言って社会主義がいいと言っているのではない。尚悪い。道路の清掃は市役所がするもの、自分の家の前のゴミさえ拾わない。何でも機械に頼る。手足を動かすだけ損だと思っている。

若者は１人残らず携帯を持っている。殆ど中毒と言っていい。一刻もそれなしでは居れない様である。将来電磁波による脳障害が出るのではないか。家では待合室しか知らないが、旅行すれば電車の中その他の場所でもそれを見ながら盛んに指を動かしている。

うちの診察室には携帯はご遠慮下さいとは書いてない。呼び出し音を聞いたら教養の程度が解るし、話している内容にも興味のない事はないからである。診察の途中で話す者もいるが自由に話させて置く。外に出ないから社会見学の

一端である。

その上人間はいろいろな物を作り出す。小は生活用品、デジカメから大は航空機、ロケットまで。ロケットを打ち上げ、宇宙を開発して一体それが人間の幸せにどの様に役に立つと言うのか。これこそ資源の浪費、地球の終末を速めるだけではないか。それを又各国が競争する。全く限りがない。

目を世界に転ずれば中国などは広すぎて持て余しているから10幾つかの州に分けてそれぞれ独立させればうまく行く筈だのに、それどころか更に周辺のチベットやウイグルまでも併合しようと躍起である。チベットは資源が豊富な由、それならちゃんとした貿易で買えばいいのではないか。ただで手に入れようとするからそうなる。一体どれだけ拡げたら満足するのだろう。今や中国は全世界を傘下に置く事を夢見ている由。日本の攻略計画などはほんのその前哨戦と考えているとの事。最近の国を挙げての反日政策も、国民をその目的に向かって一致団結させる為の手段であるらしい。ロシアも同じ。

一党独裁と彼等の権力を守る為に民主主義を踏みにじる国家に愛想を尽かして、最近中国から日本に帰化した石・平さんが言っている。

動物は腹一杯にさえなれば争わない。それに反して人間の欲望には限りがない。人類はその強欲故にそのうち自滅するだろう。老子はいみじくも数千年の昔、小国寡民を唱え文明から隔離された小さな村に住むのが人間にとって一番幸せであると喝破した。この馬鹿馬鹿しい汎世界的資本主義の文明を捨てて各国が昔のように自給自足の農耕社会に戻ればいい。そうすればウォール街の拝金亡者達と関わり合わないでも生きられる。

もはや人類の未来に期待するものは何もない。そうかと言って鬱鬱と日を過ごしている訳ではない。凡てを諦めれば後は光風霽月、安らぎの世界が拡がっている。残された余命を自分なりに生きるだけである。

「幸いなるかな期待せざる者、そは裏切られる事なければなり」

古稀雑感

新垣医院
新垣　善一

“ 明けまして御目出度うございます”

さて、本年は戦後65年、安保改定50年の節目の年に当たります。

ところで、日米関係は安保体制の枠組みにガッチリ組み込まれており、就中、本県は国土の1％に満たない県土に全米軍基地の75％が立地しており、基本構図は今に至るも変わりありません。

しかし、昨年8月30日第45回総選挙において自公政権が歴史的大敗北を喫して政権交代が実現し、国内に漂っていた閉塞感がとれ“ 明るい未来”が展望できる予感があります。沖縄県にとっては、基地負担の軽減、地位協定の改定等基地にまつわる諸課題の解決をする千載一遇のチャンス到来といえます。この際、目先の利益に惑わされる事なく、長期的視点に立って県益を主張することが肝要と思料します。

ところで、我県は、戦後27年に及ぶ米軍統治の後、昭和47年5月15日“ 核抜き、本土並”のスローガンの下、祖国復帰が実現しました。私は同年、日本政府派遣医として帰郷し、中部病院に奉職しました。当時県内の医療情勢は現在とは比較にならない程、戦後の影響が色濃く残っていて、各部門とも未整備の状況でありました。しかし中部病院は県内のセンター病院として、米国式研修医制度の下、新垣院長を先頭に各科各部所が切磋琢磨して、野戦病院なみ等と称せられ乍ら日々奮闘していました。スタッフも皆若く、例えば同期には呼吸器の宮城先生、整形外科の長嶺先生、泌尿器科の大山先生、脳外科の嶺井先生、救急外科の真喜屋先生、また若くして亡くなった内分泌の国吉先生等、血気盛んな青年医師達がいました。私自身は呼吸器外科が専門だが、当時県内において

は、未開拓の先天性心疾患の外科的治療の推進に没頭し、人工心肺使用下開心術がルーチンの業務として定着したのを機に退職し、昭和53年7月開業しました。開業して程なく中部地区医師会の役員となり、当時会員は100余人で各市町村より依頼されて学校医、予防接種等の業務に従事していました。しかし、職能団体としては未熟で会員の活動拠点となる会館もなく、その建設が共通の認識となっておりました。当時の新里会長は会館用地の取得に熱心で北谷町宮城の現会館の土地を確保し、その完成に全力投球していたところ健康を害して一命を落としてしまいました。そこで執行部としては、急拠、桑江先生に会長就任を依頼し、前会長の遺志を引き継ぐことになりました。桑江会長は強力なリーダーシップを発揮して昭和56年8月、用地取得の承認を得て事業の早期実現に努めました。

執行部は、昭和58年1月設立準備委員会、同59年3月建設委員会を立ち上げ、同61年6月第34回定期総会において会館建設の事業計画案が承認され同63年3月竣工しました。今振り返ってみますと急がしい中にも、全員が一致協力して事に当たり、“ヒトの和”チームワークの大切さを痛感いたします。

医師会館と健診センターを併設する基本計画の下、会員からの受託検査、半日人間ドッグ、住民検診の3事業体制を誠実に実践したのは建設担当長田理事、センター運営担当幸地理事でした。その他琉大、中部地区歯科医師会、関係市町村、特に会員諸先生、職員等の協力を得て開業後5年目にして会務は単年度黒字決算をとげ、その後は順調に推移し医師会の諸活動の拠点、原動力となっています。

私は平成10年3月金城会長にバトンを次いで地区役員を退任しました。その後、平成16年より県医師会の代議員会議長として現在に至っています。

以上、たまたま私自身の極く限られた経験をもとに復帰時点より今に至る経緯を述べましたが、同様のことは県内の各界各層で実行され、道路、港湾、建築物等社会インフラは見違える程に再建構築されています。しかし、県内の基地は占領下、銃剣とブルドーザーの強制接収により、しかも民有地に建設され、県民としてはこれ以上の“新基地は御免だ”と云うことが本音であり“新基地建設反対”を表明する“天の時”だと思います。

この度、戦後初めて本格的政権交代が実現し、この機会に国民に基地負担の軽減を強くアピールすることが必要であり、基地に関わる諸課題の解決が1日も早いことを願うものです。

以上

桃源郷にて

桃源の郷
猪本　朝江

明けまして御めでとうございます。常日頃より皆々様方には御世話様になり御礼申し上げます。

歳月人を待たずと申しますが、沖縄へ来まして、あっと云う間に5年が経ちました。その間にちょっとした体の故障もありましたが、とても楽しい毎日でした。素朴で暖かい人情、花と緑の豊かな島、青い海、そして三線の音色に癒されました。振り返ってみまして、この5年間で地域の皆様方に何かお役に立ったのだろうか、又何か成果はあったのだろうかと考えておりました時、人生の大先輩方から（先生、カチャーシーがだんゝうまくなって来たさー・色も黒くなったし。上等、上等。）とお誉めの言葉を頂きました。ああ、そう云う成果もあったのかと思わず笑ってしまいました。

最近、困った事が起りました。敬老会で、カジマヤーとか、トーカチの言葉に慣れてしまって、あれ？今迄、88才は何て云ったっけと一瞬、米寿が出て来なくてびっくりしました。88を八十八に書き変えてみて、あゝ、そうだった

と米寿を思い出した次第です。これが年相応の物忘れなら良いのですが、その時、あの病名がさあーっと頭をよぎり、足元がぐらつきました。今の所、すぐ思い出しているから、まあ良いかと自分を納得させています。同年輩の人達に物忘れについて聞いてみましたら、皆さんも同様の悩みをお持ちの御様子に同病相憐み慰め合っています。近い中、脳ドックも考えてみなければと思っている所です。どうにもならなくなって来ましたら、あがき踠く事は止めて、（忘却は神のおぼし召し）と率直に受け止め感謝する事に致しましょう。こんな事を云っていたら、医学の進歩はありませんね。これから先、年を重ねて行けば、長生き病と申しますか、どんな病が待っているか分かりません。医者の不養生と云われない様にしたいと思っておりますが、どうしても自分の事は後回しになりますね。少々、いや、かなりがたが来ましたが、折角頂いた命ですから大事にしなくては申し訳が立ちません。自然体で淡々と生きて、（お皺さん）と呼ばれる様になりたいと思っております。理想は晩年のオードリー・ヘップバーンさんの皺、いいですね、見事です。皺こそ女の値打、宝です。（皺まで愛して）と云う歌が出来れば、世のお皺様達は大威張り出来ますのにねー。皺美人大賞と云うのがあっても良いのでは。その時は私が審査委員長になりましょう。その人の人生が見えない顔なんてつまらないでしょう。私はアンチ・エージングと云う言葉はあまり好きではありません。どこかに無理が来る様に思えて、私にはスロー・エイジングが合っている様に思います。落日を引き戻そうなんて考えたくありません。その時が来たら、静かに落日を待ちたいと思います。とは云っても、時々、無駄な抵抗をしているかも知れませんが。こちらへ来る前は心配しました気候（台風）や食物、そしてウチナーぐちにもすんなり馴染み、もしかしたら私のルーツは沖縄かもと思った位です。ただ、沖縄時間にはちょっと戸惑いました。郷に入っては郷に従えと申しますから、私の方がこちらのテンポに合わせなくてはいけないのでしょうが。折角、時間がゆっくり流れている島へやって来たのですから、ゆっくり生きたら良いのだと思う様になりました。この沖縄時間こそが長寿の秘訣の一つだと確信しております。

大分、ウチナーンチュらしくなって来たとは思っているのですが、泡盛は飲めません。ちょっと肩身の狭い思いをしております。おみやげに時々買って帰りますがとても好評です。泡盛だけではなく他のアルコール類も飲みませんし又、自慢出来る程の趣味も持ちません。こう云う人間は呆け易いそうですが。従業員は私の事を不思議人間と思っている様です。何が面白くて生きているのだろうと思っているらしい。残りの時間が少なくなって来ますと、遊んでいる暇はないのです。今は仕事が面白いと云っておきましょう。お正月早々、きざな事を申しましたが御免遊ばせ。今年はウチナーンチュ見習から中級コースへ進んでみようと思っております。今年の努力目標は山羊汁。でもやっぱり駄目かも。あの可愛い目がちらゝして来ました。

トク、トク、トク…いい音ですね。泡盛をグラスに注いだつもりです。それでは皆々様の御健康と御多幸を祝しまして、さんぴん茶で乾杯！！今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

古希となり足るを思う草の粥
もう少し浮世に居たし花と月
南国に果てるも良しナベラー汁

寅年、年頭諸（所）感
― 自分史から

琉球大学名誉教授、沖縄心身医学会名誉会長、
前医学部精神衛生学教授　石津　宏

明けましておめでとうございます。

平成22年（2010）が、良い一年でありますようお祈りいたします。

県医師会から干支（えと）にかかわる新年の記事を依頼されました。私は、昭和13年（1938）の寅年生まれの満71才、足かけ72年にわたる歳月を、寅年を指標にしながら、心に浮かぶままオムニバス風に記します。

生地は旧台湾、台中市で、父は昭和4年（1929）総督府立台北医専（旧台北帝大の前身）を卒業後、産婦人科を開業していました。まだ戦争前で、当時世の中は希望に満ち溌剌とした雰囲気であったと、国立台湾大学医学院の教授から後年伺いました。

幼児の私の記憶には、台湾語の「てー、ゆーちゃこぇ」とのんびりした物売りの声が残っています。「てー」とは杏仁茶、「ゆーちゃこぇ」とは油で揚げた棒状の軽い食べ物で、ふくよかな香りと味は終生忘れられないものです。戦後29年目に台湾へ行き、生家（父の病院はまだ残っていました）を訪ねた折、多勢の台湾の方々から「坊やちゃん、おかえりなさい！」（広島大学医学部講師でしたが･･･）と大歓迎され、その時にも一番先に「てー」と「ゆーちゃこぇ」を食べにゆきました。幼児の味覚や嗅覚のメモリーは脳の神経機構に深くインプットされるものです。

次の寅年、昭和25年（1950）は、敗戦で山口県に引き揚げ耐乏生活をしていました。冬はボタン雪が降り、食糧は乏しく小学校の畠で芋を育て、緑の乏しくなった山には杉の苗を植えました。焼け野原になり貧しくても、人々は荒れた山林を開墾し、田んぼを作り稲を植え、みんな力を合わせて必死で働き「国破れて山河あり！」と額に汗して勤労にいそしんでおりました。不景気と失業で無気力化した平成の日本人に欠けている元気と勇気が、その頃の日本人にはありました。大切なヒントが当時の昭和にはあると思います。

次の寅年、昭和37年（1962）、私は医学部5年生で東京に住んでいました。母校の日本医科大学は東大に近く、臨床の教授たちは、内科も外科も産婦人科も精神科もみんな東京大学医学部出で、おかげで最高の医学教育を受けました。当時、東大赤門前の「白十字」という喫茶店に、東大、日本医大、順天堂大のＥＳＳ（English Speaking Society）の仲間が集まり、3大学で英語で話す週末を過ごしましたが、その仲間から私を含む3名の医学部教授が出ました。後年、自衛隊那覇病院長として沖縄に赴任した井出直宏君も1年後輩の仲間でした。

次の寅年、昭和49年（1974）には、私は広島大学大学院を修了後、精神科の講師となり、新しく日本に導入された「心身医学」「心療内科」について、臨床各科の若手医師や医学生達を集めて「広島大学PSM（心身医学）の会」を作り、勉強会を開いていました。この参加者の中からも後年、たくさん医学部教授、助教授が誕生し、その中には広島大学病院長もいます。････燃えるエネルギーは人を育てるもののようです。

次の寅年、昭和61年（1986）には、私は琉球大学医学部精神衛生学教授として沖縄へ赴任して4年目を迎えていました。沖縄心身医学協会を設立し、これを母体に平成3年（1991）、沖縄心身医学会を県医師会医学会の分科会として創設しました。････人にはその時々に為（な）すべき「クリティカル・タイミング」というものが刻まれているのでしょうか。

次の寅年、平成10年（1998）には、琉球大学大学院保健学研究科長になり大学の評議員として管理運営の一翼を担う立場でした。23年にわたる教授時代を通して、第44回日本心身医学会総会をはじめ、国内学会を11、国際学会（第11回アジア心身医学会）1つを沖縄で主催し、国立台湾大学医学院との相互訪問学術交流会をレールに乗せてきましたが、これらに対する県医師会の先生方からの多大なご支援に、心から感謝しております。

平成22年（2010）の寅年は、定年後6年目を迎えます。沖縄と実家の山口県での生活が平穏で実り多いことを願っています。そしてまた今年も、諸先生、みなさまのご多幸をお祈りするとともに、よろしくご交誼のほどお願い申し上げます。〔寅年、元旦〕

附．白虎もいいが、縦縞の黄色い猛虎が好きな私です。

模合雑感

中頭病院
大山　朝弘

小学校の頃母親は学校の教職を退いて“無尽会社”に勤めていた。仕事の内容は知らなかったが、日暮れ時（自宅に居るのを見計らって）集金に歩き回るので特に米軍相手の裏町に行くときは母親に命ぜられ、付き添い兼用心棒兼見張り役をした。その意味で無尽と言う言葉は早くから知っていたが、それから社会人になるまで無尽と縁はなかった。医者になり沖縄に帰省することになって、初めて模合という言葉を耳にするようになった。模合とは広辞苑にも載っていない沖縄でしか通用しない単語だ。いかにも横のつながりが強い沖縄ならではの風習で、ユイマール精神である。

調べたところ模合の起源は琉球王国の時代まで遡ることができる。当時の三司官の蔡温は、士族の門中間の総互扶助を図るために制度化した。当時の模合は、貨幣でなく農産物などの食料品などが模合の対象であった。変り種としては「労働の提供」というのもあった。

明治時代になり、各地に銀行が設立されるようになるが、一般庶民には敷居の高い存在であったため、庶民向けの金融制度としての地位を確立した。営業化して無尽会社に成長した。その後昭和26年（1951年）相互銀行法制定により相互銀行に転換・統合された。

沖縄社会に乗り遅れることなく、私は今2つの模合に入っている。

1つは帰省後、高校時代の同期生の模合に加えてもらい、以後40年余にわたり親睦が続いている。皆、若い頃は元気があり、豚1頭、山羊1頭などをあつらえ、焼き豚やヤギ汁を作り食した楽しい思い出がある。しかし今は体力の衰えで、他人まかせの居酒屋で過ごすことが多くなった。もう1つの模合は、中部地区医師会北区の模合に属している。もう30年近く参加しており、先輩は他界された方もいらっしゃいますが、この北区の模合は出席率がとても良く和やかな雰囲気である。ここのメンバーは昭和一桁の先輩から、昭和30年代の若いばりばりの先生方まで年代が大きく開いているが、それにもかかわらず各年代の先生方が思い思いの発言をなさって、結構話題は途切れません。月1のムエーですが、出来るだけ参加するよう心がけている。

これだけ社会に根付いた模合ですから、市民権を得てこれからも沖縄の友愛精神が何時までも平和の内に続くことを願って、昭和13年生寅年の挨拶（随筆）といたします。

平成21年10月　記

年輪を刻んで

医療法人宇富屋 玉木病院
院長　中山　勲

寅年の今年は私の6回目の「生れ年」である。高校同期生の生年祝いをすることになり、沖縄本島に住む10数名の有志で話し合い、昨年11月から準備を進めている。有志の大多数は、30歳の頃から70歳を過ぎた現在まで月に1回集まって飲んでいる仲間である。私たちの

干支（えと）に因んで会の名前は「虎の会」と称している。

その間、1人は脳出血で逝去した。もう1人は脳梗塞で半身麻痺が残り、この数年は参加していない。残念至極である。他の仲間の数名も手術などのために一時休んだことはあるが、現在は元気に参加している。

私たち宮古高校九期生の節目節目の行事の企画運営をしてきたのは、この「虎の会」である。宮古にも「虎の会」があり、両「虎の会」が連携して、これまで大きな行事を行ってきた。平成18年は「卒業50周年祝賀会を成功させる忘年会」、平成19年は「卒業50周年記念祝賀会」、平成20年は「古希祝賀会」と3年連続行った。本土は無論のこと、アメリカから毎回参加する者もいる。18年の忘年会は約80名が参加した。19年の卒業50周年記念祝賀会には、住所録に載っている189名中の118名が参加し、スペインからの友人もいた。20年の古希祝いにも80名余の参加があった。

このように毎回多くの同期生が参加するのは、その大半が社会の第一線から引退していることもあるが、同期生に会うと若い頃の懐かしい思い出が次々と心に湧き出てくるからであろう。そして飲むほどに語るほどに、気持ちが若返り、力も漲る感じになるのだろう。すなわち皆それぞれ「懐かしさ」をお土産に持って集まるのである。

生年祝いという言葉は、大辞林には載っていない。『南島俳句歳時記』を開いたら、奄美以南の南島独自の風習だという。干支の年は、本来厄年であるが、にぎやかに祝うことで厄払いになるらしい。宿命的に最初から良い年や悪い年が決まっているというのは直ちに信じがたいが、何か合理的な根拠があるのだろうか。しかし、理由はどうであれ皆と会いたい私たちにとっては、厄払いの祝いということは立派な会う理由になる。

年月というものについて人間は二種類の考え方を持っているように思われる。一つは「歳月人を待たず」というように、人を置き去りにして一直線に進行して、二度と戻らない「時間」である。二つ目は「冬来たりなば春遠からじ」というような、循環する「自然」である。「時間」は厳しく、取り返すことが出来ない。「自然」には優しさがあり、耐えていれば良い時に巡り合える。「時間」の年月は、人間にとって生命と同じで、若返ることはない。「自然」の年月は樹木の年輪と同じく、繰り返し人生体験を人間に刻みこむ。無数の年輪を持つ老木が幽玄の美しさを見せるように、多くの苦難を乗り越えた人間には犯し難い風格がある。

今度の生年祝いには、昔の少年少女の顔から、年輪の刻みこまれた風格と味のある顔に変化した、多くの同期生に会いたいものである。そして人生航路の荒波に雄々しく立ち向かってきた、お互いの健闘を讃え合いたいと思う。

古希を迎えて

玻座真内科医院
玻座真　博公

12年前、還暦を迎えて一応自分にけじめを付けるため、還暦記念の手作りの小冊子を子供達だけに与えた。その序文に、「平成7年、那覇市医師会報夏季号の原稿を依頼され、四苦八苦して書きあげたものが『ペットと共に』である。ペット共々家族全員が登場しており、初めての随筆を飾るにふさわしい記念碑的作品となった。その後、がんばればなんとか書けるものだとの自信と年のなせる業か素直に自分を表現する余裕が出来てきた。自分の生きている証を記録に残しておきたいという欲求も当然あるだろう。本小冊子は、その成果として医師会報に寄稿した数編をまとめたものである。」と書いているが、すでに12年後の抱負があった。

還暦の年から県内2新聞の俳壇に投句を始めていつしか古希を迎える年となっている。新聞

に採用された句がいくらか溜まっていたので1年前から句集の上梓を考え、これまでの句稿を整理していた。9月になって早くも新春干支随筆の寄稿依頼が届き、慌ててその日出版社に電話して句集発行の相談を始めたところである。

句集の内容は、ほぼ10年間に新聞に掲載された句から成っているが、一部の自選の句や俳句雑誌社の企画に応募したものも入れて360句を予定している。

句集名は「なんくるないさ」と決めてある。文學の森社の第1回全国方言俳句で優秀賞になった「仮の世はなんくるないさ浮いて来い」からとったものである。ザ・俳句歳時記によれば、「浮人形とは水に浮べて遊ぶ子供の玩具をいいます。人形・船・金魚・怪獣などを形どったもので、ゴム・セルロイド・ビニールなどの素材でできています。水の遊びということで夏の季語になっています。『浮いて来い』は『浮人形』が水に引き入れても浮いてくることから生まれた表現で、人間を浮人形に置き換えて詠んだ作例も見られます。」

還暦から古希まで、句稿をひもとけばいろいろの思い出が浮んでくる。「わが眼鏡」と題した私の家族の部分を少し披露するのをお許し願いたい。

「ペットと共に」の主人公たち、当時8才の雌猫は一番長生きし平成20年、21才で大往生した。7才の雄猫は16才、6才の雄犬は15才で亡くなった。

老犬と歩み共にす冬の朝
よく眠る猫ゐて燈火親しめり
老猫のゆるり足折る春の昼

平成20年、長い間寝たきりであった母も97才の仮のカジマヤーを済ませ大往生した。

老いし母のふと口ずさむ十三夜
夏立つや母今生の息をつく

母をみとったあと診療所開設以来の入院を閉めた。長男は平成19年に帰沖し近くの病院に勤務、次男は九州の大学病院に居る。ふたりの結婚式でのはなむけの句である。

旅立つや平和の像に春日射し
明日はイヴ今日もふたりの灯をともす

「春の海のたりと胎児寝給へり」「春の闇宇宙遊泳する胎児」と詠んだ孫たちも元気に育っている。

水無月や眼鏡の奥に未来あり
やはらかき身を子は反らし五月来ぬ

最後に書くべきことがあった。私にはもう一つの名前がある。還暦の年、新聞俳壇に投句するようになって俳号を使っている。私が鳩山博水である。12年あとの第二句集の話をすると鬼が笑うだろうが、それを支えにゆっくりがんばって行こう。

古希といふ授かりものや年惜しむ

星と人間

眞喜屋　實佑

農耕に役立てるため天体観測による暦法は古代メソポタミア、エジプト、インド、中国など四季の変化の少ない赤道に近い大河のほとりに栄えた国で発明された。この天文学上の知識が後の人類の発展に果した役割ははかり知れないほど大きい。わが国と関係の深い中国では殷の時代に十干の暦法が使われ王の名前として十干の名を刻した甲骨が殷墟から発見されている。つまり農事のための暦がまつりごとや人事にも用いられるようになったのである。時代が下り

国家、社会が複雑になり、さらには戦乱が続くと不安が人に心やすまるものを求めさせるようになる。そこに宗教や占い、娯楽などが生まれる素地がある。こうして古代バビロニアに占星術が生まれ、中国戦国時代には十二支に禽獣が配され人の運勢や吉凶の占いに利用されるようになった。中国では戦国時代から漢代にかけて十干に陰陽五行説が加えられ、日本に伝えられるとわが国では十二支にまで陰陽五行説が配当されるようになり、その使用目的や範囲が拡大され次第に複雑化、迷信化していった。西改にも十二宮（星座）は先に述べたように古くからあったがその星座に人物、動物、器物などの絵姿が描かれたのはフラムスチートの「天球図譜」（1729刊）においである。

1749年8月28日正午にゲーテは生まれた。「まことに幸運な星のもとに呱々の声をあげた。太陽は処女宮に立ち、その日の最高点に達し諸星もそれぞれ太陽をながめ、ただ満月だけが支配力をふるう惑星時に入ったのでその時刻が過ぎるまで私は生まれられなかったのである。占星家たちはこのめでたい星位を大吉とうらなってくれたものだが、難産のすえ生命を取りとめたのもこの瑞相のおかげであったかも知れない」と彼は「詩と真実」の冒頭で述べている。ゲーテは星辰の位相で人間の運命が定まると信じていたのだろうか。その答えは誰にもわからない。ファストに見られる彼の神秘主義的思想を考慮に入れるならば彼の誕生とその時の天球の動きとは必然という目にみえない糸で結ばれていたと考えることも可能であろう。あるいは難産で生死の境をさまよって九死に一生を得ることのできた者のみが感じる自然（神）への感謝と畏敬の念がそういわしめたのかも知れない。彼は自然児であった。自然を愛し自然との一体感、共感のうちに生きた。だから星辰も彼の一部であり、彼も宇宙の一部であった。

西洋の暦は自然の法則で動く星辰の位相に基づくものでありそれをどう解釈するかはその人の世界観、人生観による。つまりそれをみる当人が自らその運勢を決めることになる。一方東洋の暦法には普遍的自然現象に非科学的、人為的な要素が付け加えられたためにそこから導かれる判断も一般性を欠くこととなる。ともあれ今年はその暦法による庚寅（カノエトラ）に当たる。十干は自然現象とは無関係な10進法による数の数え方であり、陰陽・五行説も宇宙を支配している法則とは思えない。かりにこれらを認めるならば庚（カノエ）の運勢は大吉であるらしい。何故なら庚は金が勢いを得る（陽）ことを意味すると解釈されるからである。十二支の寅についてはその力強さ、敏捷性、威厳、美しさから吉と判じてよかろうと思う。断定しないのはその虎がその居住区を狭められ種の集団が小さくなり絶滅の危機に瀕しているからである。過去半世紀間に約20種の哺乳動物が消滅したといわれるが人類がその責の大半を負っているのである。人類は全ての生命が等しく生きんとしていることに深く思いを致すべきである。何故なら他があるから自己があるのである。天球は自から助ける者を助けるだけでなく他を助ける者をも一層生の高みへと引きあげてくれるのだ。相互依存こそ宇宙の法則ではあるまいか。

6回目の寅年を迎えて

嶺井第一病院
嶺井　進

あけましておめでとうございます。

昨年、国内では生活重視を訴えた民主党が政権を取り、海外にあっては変革を主張したオバマ氏が大統領となった。いずれも世界大不況の暗い気持ちを一新する出来事であったと思う。

鳩山政権は、無駄が多く効率の悪い行政から、子育て、人材育成に重点を置き、中央政府による画一的な行政から地方に各々適した制度に舵をとりつつある。また、世界に向けてCO_2 25％削減を宣言し評価されている。

民主党の医療界に関する政策をみると医療費削減を中止し、医師数を50％増員する、介護職の手当を増やす等となっている。

これまでの自民党政権は、目覚ましい戦後復興を成し遂げ、経済大国を築きあげてきたが、長期政権のおごりもあって、官僚の跋扈をゆるし、国民生活を重視せず、国民の意見をくみ取れなくなってきた。今後は国民の目線に立った政党になることを希望する。

我々医師会は、今後どの政党にも組みせず、国民の健康を守る専門家集団の立場から是々非々の提案や提言をしてもらいたい。そしてもっと国民から信頼される医師会を目指すことを希望する。

メディアで失業率の悪化と自殺者の増加が報道されている。新政権には弱者救済の社会のセーフティネットの強化も期待したい。

江戸時代まで国民の80％は農水産業であったが、現在は5％まで減少している。このように社会のニーズに応じて国民の労働力はその配分が変わる。近年、高齢社会を迎え、医療福祉分野の人材ニーズがかなり高まっている。さしあたって大幅な医師、看護師、介護士の増員が急がれる。

民主党政権は社会のニーズに柔軟に対応していると思われるので、今後を待ちたい。

6度目の干支、古希を迎えて

宮城　征四郎

ついに私も6度目の干支を迎え、日本人口1億3千万のなかの22％を占める65歳以上の高齢者の仲間入りを果たす事となった。

おまけに今年は古希を迎える事になる。

そして私にも干支随筆の順番が回って来た。

思えば沖縄県医師会員となった私にとって、既に42年の歳月が流れた。

7度目の干支を迎える会員は今年84歳となるわけであるから、さすがに沖縄の医師人口の中でも、その数は急減するに違いない。

私が書きしたためる沖縄県医師会報での、おそらくこれが最後の干支随筆になるものと思われる。

64歳迄、私は沖縄県の公務員医師として奉職した。

最初の3年間は金武保養院と言う結核療養所で働きはじめ、その後は64歳になる迄、沖縄県立中部病院で呼吸器内科医として働かせて頂いた。

今は多くの私立の病院群からなる群星沖縄研修センターと言う所で研修事業に携わり、主に初期研修医相手の勉強仲間として日々を過ごしている。

しかし私も人並みに年を取って来た。

若い頃、黒々としていた頭の毛は今やまっ白になり、老眼鏡をかけ、定期検診を受けて生活習慣病のチェックを毎年受け、歯医者に定期的に通い、未だ補聴器は必要としないけれども、いずれはそのお世話になる覚悟をしなければならない。

3年前には私自身が小脳出血を患らい、2ヶ月間の入院生活と卒中後のリハビりを余儀なくされた。

2年前に最愛の伴侶に先立たれ、兄弟姉妹や甥、姪などは多数居るものの、子供や孫を持たない私は突然、家庭的には天涯孤独となり、自分の人生の大半を伴侶に委ねていた私は呆然自失して途方に暮れた。

伴侶を失った独居老人の生命予後が非常に劣悪である事も多くの論文などで読んで承知している。

読書の傾向は、これ迄の戦国武将の物語からより宗教的、哲学的となり、はじめて「死」と向き合う思索や思考が芽生えて来た。

遅すぎると他人は嗤うかもしれない。

しかし、これは厳然たる事実である。

人間は何時までも若くはない。

しかし何処かでは自分だけは「老い」とは無関係であるかの如く錯覚している。

老いて行く自らを先ず自覚し、自らを叱咤激励し、何らかの工夫をしつつ人生を全うして行かねばならない。

私の義父は100歳の天寿を全うした。その人生訓に言う。

「生きる、死ぬは運命、
健康は努力、
食はいのち」と。

女房亡き後の私の日課に毎日1時間の運動が加わり、料理学校に入学して自ら料理することを覚え始めたのは、義父のこの人生訓と必ずしも無縁ではない。

「遂に行く、道とはかねて聞きしかど、昨日、今日とは思わざりしを」

とは千何百年か前の在原業平の句である。

間もなく私は料理学校の修了式を迎える。

料理学校を卒業したら、次は三味線やエイサー、カラオケを習うべく芸能学校へ入学したいと思っている。

老骨に鞭を打ちつつ、何故か私の夢は今日も絶え間なく広がって行く。

還暦にあたり

いずみクリニック
安座間　聰

新年おめでとうございます。

これまで自分の干支だからといって特別に考えたことはありませんでしたし、「還暦」といっても昔のように祝う程のことは無いと思うのですが、この度、機会を頂きましたので、一寸だけ現状を見詰め、一寸だけ今後の抱負を述べさせていただきます。

私は医学部卒業後1年間のローテート研修・1年間の内科研修の後、27年間消化器内科なかでも消化管診断学を専攻し、しかも後半の15年間は専ら人間ドックと健診業務に従事して、一般臨床からは離れておりました。

平成16年に現在のクリニックに来てから、外来患者さんは高血圧症の方がほとんどで、他は糖尿病・脂質異常症・高尿酸血症・気管支喘息の方や、感冒・下痢などの急性疾患の患者さんです。久しぶりの臨床、しかも以前の専攻とは畑違いの疾患ばかりで、研修医に戻ったような緊張を感じながら、いつも手元に「今日の治療指針」や「今日の治療薬」などを置いて診療しています。現在は主要疾患に関してはガイドラインが作られているので助かりますが、個々の患者さんの治療は必ずしもスムーズには進みません。

ここで症例を2例提示します。一例目は70歳台前半の糖尿病の男性。経口薬でヘモグロビンA_{1c}が一旦6.5まで下がったものの、その後9に上昇。インスリン導入も考えながら、再度生活指導を強めましたが、受診の都度体調を尋ねても「自分は病気とは思っていない」との返事ばかりで、自分の病気を理解してもらえません。どうしたらいいものかと思案に暮れながらも毎回しつこく指導して、最近やっとHbA_{1c}が7.5未満に下がってきています。この方は、飲酒の問題で心療内科通院中であり、理解力の低下があるため、これからも治療に難渋しそうです。

二例目は60歳過ぎの糖尿病の女性。数年前他院で治療を受けていましたが、採血恐怖と経済的理由から中断。その後不安障害のため当院心療内科に通院していますが、ヘモグロビンA_{1c}が11に上昇していたため当科に紹介されました。治療と採血の必要性を説明して経口薬を開始し、HbA_{1c}は8.0あたりまで下がってきています。血圧と脂質も薬物治療の必要なレベルですが、やはり経済的理由から薬が増えることに強く抵抗するため、降圧剤を処方するまでに3～4ヶ月の説明・説得を要しました。次はスタチンの処方です。この方は精神面での問題があるため、“脅し”をかけるわけにもいかず、苦労します。また治療にあたり、経済的負担を

軽くする方法がないかを考えることも必要と感じています。

クリニックでの診療のほかに、養護および特養老人ホームの嘱託医をしていますが、そこで最近特に感じるのは胃瘻の増加で、ホーム入所者140人の一割強の方が胃瘻となっております。誤嚥性肺炎を頻繁に起こす方には造設せざるを得ないと思うのですが、口腔ケアなどでもう少し機能を維持できないものでしょうか？

また、一昨年から小学校の学校医をやらせて頂いております。低身長にどう対応するか、検診で脊柱側弯をどう診断するか、など一から勉強し直しています。

取留めの無い内容になりましたが、還暦に達した今、あと十年は現役を続けたいと思っています。これからも皆様方にはいろいろお世話になると思いますので、よろしくお願い申し上げます。

これからの人生について

とよみ生協病院 健診部婦人科
稲福　盛弘

新年あけましておめでとうございます。

とよみ生協病院産婦人科の稲福です。元気にやっていますのでよろしくお願いします。

とうとう私もいつの間にか還暦を迎えてしまいました。この間、いろんな世の中の移り変わりを体験してきて利口になってきました。人生の荒波を大病もなく健康に無事乗り越えられて今日まで来れたことに感謝したいと思います。

還暦とは新たに生まれ変わって、これから再び新しい人生を歩むという意味が込められていて、新たな出発を前に普通は過去のことを振り返っていろいろと書くところですが、おぼろげながら過去の記憶はあるのですが、まだ感傷に耽る年齢でもありませんし、私は常に過去よりも現在を大切にして明日に向かって進んできて、昔から若年性認知症かと思うくらい（ただし、私は絶対認知症とは思っておりませんので悪しからず）過去の記憶が吹っ飛んでしまい、すぐ忘れるという特性がありまして、良きにつけ悪しきにつけ、過去のことを引きづらないで来ました。そのお蔭でストレスをあまり背負い込まないで今日まで来れました。今まで産科という職業に携わってきて、ものすごいストレスに曝されてきたのですが、そういう特性のお蔭でストレスは最小限に切り抜けてこれたと思っています。

数年前から視力も低下してきて、手術に不便を感じるようになり、そろそろ産科は潮時と判断し、白髪も目立ち老いを感じ、何とか老いを阻止すべく、夜は十分な睡眠をとり、大好きな運動時間を増やし、規則正しい生活をしたく、もう少し自分の自由な時間が欲しくて去年からとよみ生協病院にお世話になり、健診部で子宮がん検診を主体とした仕事に従事させてもらっています。

沖縄市でアパート住まいだったのを持家の那覇市へ引っ越し、7年振りに地元に戻ってきました。前職場では通勤時間片道40分かかっていましたが、今は徒歩可能となり通勤距離時間とも大幅に短縮されて大変便利となっています。もちろん今までの職場においても充実した仕事をさせてもらい感謝しています。

とよみ生協病院は常勤医師8名の小じんまりした病院ですが、建物は旧沖縄協同病院ですので大きく、広い空間の医局にあって、気持ちも大らかでゆとりを持って快適な職場環境の中で楽しく仕事をさせてもらっています。

今まで、誠実に真面目にそして一市民一医療人として社会に奉仕し、出会った方々とは感謝の念を抱きながら接し、人のため世のため家族のために、社会のルールにのっとって他人に迷惑をかけないようにして、昼夜関係なく心身を酷使して凡人なりにも一生懸命人生を歩んできました。

還暦を機に心機一新、これからの人生は、無

理せず、ストレス溜めず、認知症にならないように頭脳を使いよく考え知識を広げ脳賦活を促し、生活習慣病予防も兼ねて毎日趣味の運動、日野原重明先生に見習って院内では暇を見つけては8階の階段の昇降を、帰宅後は室内自転車エルゴメーター（100ワット）1時間を主体としたその他諸々の運動を行っていますが、それらの運動を継続して寝たきりにならないように体力をつけ、睡眠不足も生活習慣病の源ですので、夜更かしせず、くれぐれも認知症の1症状である昼夜逆転にならないよう肝に命じ、十分な睡眠を取り、ちょうど今、これらが実行可能となったのを機に規則正しい生活をしていこうと決意しています。沖縄の人は長生きだが、介護を受けておられる方が多く不健康な長生きと言われていますが、そういう生活習慣をつけることによって真の長寿につなげていければと思っています。

他方、世間に目を向けてみますと、100年に1度の未曾有の不景気で職に就けず困っている人々が溢れています。自殺も増えています。人間はお互い支え合いが必要ですから何とか世のため平安のため、全ての人々が幸福になれるように少しでも貢献に寄与したいものです。

これから先何が待ち受けているかわかりませんが、何が起ころうとも物事に動ぜず泰然自然、愛を持って、地味ながらも黙々と努力を惜しまず、誠実に明るく希望を持ってこれからを歩んでいく所存ですので、とよみ生協病院ともどもよろしくお願いします。

この駄文をもって日頃お世話になっている先生方への新年のあいさつにかえたいと思います。

寅年に「林住期」を考える

与那原中央病院
井上　博隆

今年は寅年、自分の干支であるのでうれしくないはずはない。しかし、なんと還暦という肩書きがついてきた。若いころは還暦と聞くとほとんどオジンの代名詞と考えていたがそれが自分に回ってくるとは。

そんな折、偶然書店で五木寛之著「林住期」という本に目が留まった。「林住期」とは、古代インドで生まれた概念のひとつで、人生を「学生期」、「家住期」、「林住期」、「遊行期」の四期に分け、それぞれ“師について学問を学び”、“家に住んで家族を養い”、“出家して林に住み”、“独りになって旅に出る”という生き方を示唆する思想らしい。そして「林住期」は人生の後半にあたり著者によると年齢的には50歳くらいというが、一般的には定年退職し第二の人生を歩む時期になるかと思うのでやはり還暦を過ぎてからになろう。まさに私の年齢である。

さてこの「林住期」は、著者の言葉を借りると“本来の自己を生かす”、“自分をみつめる”、“他人や組織のためでなく自分のために残された時間と日々を過ごす”、という時期であるという。しかもただ人生の再出発としてではなく「学生期」、「家住期」のホップ、ステップに続くジャンプであり、人生の黄金期であると力説する。

ところが「林住期」を生きるためには今の仕事を辞める必要があるらしい。あくまで自分のために生きていく時期なのであり古代インドでいう“出家して林に住む”思想なのである。しかし現在のほとんどの人は、体が動けるまで働きたいと願うのが普通であり、あまり現実的ではない気もする。しかし著者によるとそれではいつまでも「林住期」を迎えることはできず、いずれ働けなくなると「林住期」を見失い、疲

れたまま最後の“独りになって旅に出る”という「遊行期」を迎えてしまうというのである。私も眼科医としてまだ気力はあるつもりであるが、徐々にストレスを感じるようになりいずれ手術を辞めざるを得ない時期が来るだろうと考えている。しかしその不安はあるが、同時に気力、体力があるうちに仕事を辞め自分の好きなことをやってみたいと思う自分がいることも確かである。著者はその意識を「林住期」の準備と位置づけ奨励しているのである。本文でも著者の妻が50歳に医師を辞め趣味の絵画に専念し、まさに「林住期」を楽しんでいると紹介している。いずれにしても50歳を超えると人生の曲がり角で還暦を迎えるとさらに坂道を下っていくものだと思っていた私にとって希望のもてる考え方であることには違いない。

たまたまこの原稿を書いているときに敬老の日があり、TV番組で退職後の過ごし方について報道していた。多くの人は何をして良いのかが分からなく、なかには早く死にたいと相談する人もいるという。まさに「林住期」がなく直接最後の「遊行期」に入ってしまった人たちである。悲しい現実であり著者はそのことに警鐘を鳴らしているのである。そして一生懸命「家住期」を生きているまさにこの時期にこそ次の「林住期」の存在を意識しその時期を迎える準備をすることが必要なのだと説いているのである。

さて「林住期」を迎えるためには「家住期」に一生懸命働きそれなりに蓄えが必要だという。やはり老後のための備えが必要なのである。昨年民主党が政権を握ったが、先の自民党の年金に対する失態を回復し我々の老後を保障してくれればこの「林住期」を生きていく希望ももてるというものである。

還暦を迎え、今後自分の「林住期」がどのような形で現れるのか分からないが、仕事の合間に少し自分をみつめる余裕を持つことも必要なのだろう。

寅年に因んで（病診連携と有床診療所）

東風平第一医院
甲斐田　和博

昭和25年の寅年生、今年で60歳になります。まだまだ40歳代と思っていましたが、最近の家族写真等を見るとおおいに年齢を感じます。

平成2年に八重瀬町（旧東風平町）に開業して20年目を迎えました。19床の医療療養病床を有する有床診療所です。入所者さんの多くが慢性疾患を有しており、在宅療養が困難な高齢者の方々です。最高齢者は104歳の女性で、車椅子での生活ですが意識は明瞭で会話も（方言で）ある程度可能です。食事も野菜以外は残さず食べています（入所当初から野菜はほとんど残しています）。ちなみにお茶は飲まず、冬でも水を好みます。おだやかな方で、必要なこと以外訴えもなく、睡眠も良好です。リハビリは積極的にします。この方は入所して10年以上になりますが、数年前に、徐脈で他院に一度紹介しただけで、今日までお元気です。他の入所者さんの家族も「104歳にはみえない！」と感心しています。

しかし、入所者さんの中には状態が急変しやすい方もおり、急性期病院に紹介することもあります。紹介する際、特に夜間ではかなり気をつかいましたが、最近では病診連携のおかげで、連携室に連絡し情報提供書を送るだけで適切な対応をしてもらっています。夜間も日中と同じ対応をしてもらえるため、おおいに助かっています。

最近、勤務医の多忙な勤務状態が問題になっています。特に夜間救急の忙しさは、先生方の心身の疲労になるのでは、と夜間紹介はできるだけ避けようと思っています。

また、ここ十数年、有床診療所の閉鎖が増加

していることが気になります。その要因として医師の高齢化、後継者の不在、看護師等スタッフの不足、そして保険点数の低さが影響していると思われます。

私も時々、先々のことを思います。

ですが、先輩の先生方が元気に仕事をしている様子を拝見すると、経営が成り立つうちは私も元気に有床診療所を続けたい！と思っています。

最近の日課は、愛犬のビンゴと散歩することです。私の自宅周辺は農地で緑が多く、空気も澄んでいますのでいい散歩コースです。また、週に2～3回程度、自分好みにブレンドした古酒をチビチビ飲みながら時代劇と西部劇のＤＶＤを見るのが楽しみです。

文脈のない投稿文になりました。

今年も皆様にとっていい年でありますよう。

丑から寅への政権交代雑感

沖縄協同病院
喜久本　朝善

昨年8月30日の総選挙で遂に自公政治に終止符が打たれ、戦後初めての事実上の政権交代が行われた。新政権はマニフェストの実現に向けて矢継ぎ早に政策を打ち出しており、世の中が変わりつつあることを実感している。一方、干支の世界（正確には十二支）では毎年公平に政権が代わり、今年は前年の丑から寅への政権交代となった。

小生は寅年生まれであるが、誕生日が1月28日の早生まれである。そのために丑年生まれの人たちと時代を共に過ごすことになった。この世代は堺屋太一の小説で有名になった「団塊の世代」で、とにかく人が多かったと言うのが印象である。小学校に入学した時は教室が足りなくて、本来4クラス分の校舎を5クラスに仕切って使用し、一番前の席は目のすぐ前が黒板という状態であった。この早生まれというのは実に微妙で、同級生からは遅生まれの間違いだろうと言われたものだった。決して背の高いDNAではないうえに、早生まれのせいで背の低い順番に並ぶ朝礼では、小学校、中学校と2番目または3番目が定位置であった。とにかく何をするにも人が多く、競争を余儀なくされた世代であった。

小生の母親はサンジンソウ（三世相と書くらしい）が好きで、家族の人生の節目、節目にはサンジンソウに行って運勢判断をしてもらっていた。その母親曰く、サンジンソウでは干支は旧暦で占うので、小生は丑年生まれであるということを子供の時から耳にタコができるほど聞かされていた。子供心には鈍重なイメージの丑よりは勇猛果敢な寅の方が好きだったが、丑年生まれと刷り込まれていた上に、同級生は丑年なので違和感を覚えつつも丑年生まれだと考える複雑な心境で高校時代までを過ごした。

県外で学生生活を送っているうちに沖縄が本土復帰を果たし、世の中が大きく変化してきた。かつては正月は旧暦で祝っていたが何時の間にか新正月で祝うようになった。この旧暦が廃れてきたことと毎年お世話になった諸兄姉や友人、知人に年賀状を書くようになると、いやでも干支を意識せざるを得なくなった。それまで違和感を覚えつつも丑年生まれとしていた自分だが、この年賀状作成の作業を通じていつかしら自分は寅年生まれであると思うようになった。意識のなかで自然に丑から寅へ政権交代が行われていたのである。そして、尋ねられると堂々と寅年生まれと答えるようになったのである。それを傍で聞いている母親は「あんたは丑年生まれだよ」とそのたびに不満そうに言うのだが、それは無視することに決めたのだった。最近、巷では「草食系男子」なる若者がもてはやされているようだが、家内からは「あなたは肉食系おじいさん」と揶揄されている。「おじ

いさん」にはいささか抵抗があるが、孫もいる身分では仕方がないかと割り切り、草食の丑よりはやはり肉食の寅が自分に似合うと納得している次第である。

しかし、本稿を書くにあたり調べてみると、誕生日が元旦から節分までの人は前年の干支とされているとあるではないか！となれば小生は丑年生まれということになるのだ。母親が一貫して主張していたことは正しかったのだ。同時にこれまで母親の言うことを無視してきた事を申し訳なく思い、これまでの非礼を詫びたいような気持にもなった。

しかしである！そうは言いながらも干支について詳しく知っている人も少なくなり、世間一般の常識では昭和25年生まれは等しく寅年生まれと認識されているようである。それだからこそ、この「新春干支随筆」の原稿依頼も来たのであり、これからもぶれずに頑固に寅年生まれで通そうと考えている次第である。新政権にも後期高齢者医療制度の廃止や企業団体献金の禁止、官僚の天下りの根絶など、マニフェストで訴えたことをぶれることなく実行してもらいたいものである。

寅年に因んで

眼科クリニック幸地
幸地 賢治

これで寅年を迎えるのは5回目、ちょうど還暦である。学生の頃、自分がこのような年になる事があるとは全く想像もしていなかった。その頃はただ前方に茫漠たる未来を感じていただけで、今がなかったかも知れない。今は無数の今が過去へ過去へと通り過ぎていって瞬時に景色から消えて行く、何時になるか分からないD-dayまでにどのような結果をだせるか・・・と言う現状を認識しつつ、最近起こった出来事を述べたい。

私はあまりクリエイティブな性格ではない。むしろじっとしていた方が性に合っている。旅行もあまり好きではないが、国内旅行に限っては仕方なく出かけていたというのが実情であった。女房がそろそろ外国にも行ってみたいといった事もあったが、「毛唐の国など行きたくもない。日本も全部見た訳でもないのに。」とほざいて平然としていた時期があった。数年前、避けられない諸事情と偶然の重なりにより、県医師会理事を拝命した。その結果、九州各県は言うに及ばず、あちこちに出張を命じられ旅行する羽目になった。土曜日午後の会議、懇親会を終えると、翌日早朝の便で沖縄に帰るというスケジュールをこなしていたのであるが、ある日そのまま帰るのはもったいないと考え、一人だけ遅い便に変えて近くの景勝地を見て回った。それが悪かったのか、以後は出張の度に観光して回るのがくせになってしまった。最初の外国は台湾だったが、それも医師会の仕事で出かけさせて頂いた。その頃から箍が外れ始めたようだったが、三女がイギリスのStirling大学に留学する事に決まった時、頭の中でプッツンと音がした。娘の学んでいる大学がどのような所か、見に行く事になった。女房の殺し文句に負けてしまったのだ。それは「あなたは娘がかわいくないの。」で、それでグウの音でなくなってしまった。女房は「娘の住んでいる所を見に行く。」、「どういう生活をしているか見に行く。」と堰を切ったように一人でイギリスに行くようになった。もちろん異を唱える事は出来ない。「娘がかわいくないの。」で何度でも殺されるからだ。とうとう根負けして夫婦で行く、初めてのイギリス旅行が決まった。2007年4月30日に出発、その後のゴールデン・ウィーク含んで7日間の日程となった。旅行中に困った出来事があった。Stirling大学の近くにウォーリスモニュメント（ウィリアム・ウォーリスの記念塔：映画ブレイブ・ハートで紹介されたスコットランドの英雄）で売店に入った時、水のボトルを差し出して「How much」と女の子

に声をかけたら『＃％＆＝～」と全く英語が聞き取れない。相手は数字を言っているはずなのに全く分からない。愕然とし、呆然の呈となった。旦那の危機を見て、女房殿が手の平一杯の小銭を差し出して、事なきを得た。三女にスコットランド訛りの強い人は中々聞き取れないと慰めて貰った。もう一つは大学の中を散歩中に初老の大学スタッフらしい人に「日本人か。」と声をかけられ、「義理とは何だ。」と質問された。どの程度分かって頂いたか、混乱させたか分からないが、2年後にまた来るからそれまでに日本語を勉強するようにお願いした。最後にStirlingの町並みを散歩中の出来事。そこかしことやたらと小銭が落ちているので、拾おうとすると娘がそれを咎めて「小銭を拾う人たちがいるから止めて。」というのだ。日本とは違う伝統の国イギリスに感心しきりだった。

関空から出発の日、名護市のＮ先生ご夫婦に出会った。また帰りのヒースロー空港では那覇市のＮ先生ご夫婦と出会った。偶然とはいえ驚いた。イギリスにはこれまでに2度行ったが、エジンバラ市はとても印象的で、素晴らしい町並みでそこに住む人々は上品で暖かい人柄を感じさせらた。今度はロンドンを中心に見てきたいと思っている。

「寅年に因んで」という題材であるが、単にイギリス旅行の紹介になったことをお許しいただきたい。この年になってやっと積年の蒙昧なる偏見がとれ、もう少し遊び心を発揮してもいいかな、許されるかな、という心境になってきた。成長と言ってあげて下さい。女房は堰の切ったようにと表現したが、去年はスペイン、フランスそしてイタリアと堰を切った所が本流のようになって、修理不能の状態となった。今では小生も毛唐の友人が出来た。めでたし、めでたし。

英語を考えてみませんか？

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
神経内科　小嶺　幸弘

業績をめざすだけでなく「無事これ名馬なり」も判る年になりました。課題は当科医師の増員と病院全体で退院要約の質向上と思いますが、以下の話の方が面白いと思いますのでしばしお付き合い願います。

我が子が某中学に入りました。これには楽しく勉強させてくれたＨ塾の先生方の力が大きいですが、そこを見つけた家内やその友人のおかげでもあります（そのせいか「岡山は東京から行くのか」と聞いていた家内が強くなりました）。英語の参考書を買ってあげようと書店に行くと良いものがなく、東京などの大書店でもありませんでした。This is a pen.の私の頃より教科書は良くなっていますが、文法を小出しにすると指導要領のように3年かかりまとまりに欠けます。一方、従来の文法参考書は初心者が1ページから勉強できません。名詞・冠詞までなら簡単ですが、初めの例文でさえ代名詞・be動詞・文型を含んでいます。5文型紹介の例文に過去形が顔を出しかねません。「未知の文法事項を含まない例文と章立て」が可能か、無ければ作ろうと考えたのが2006年3月でした。

工夫してプリントを作り4～9月で我が子にさせました。進学校で2年を待たず追い越されましたが、説明に無理が無いことは確認できました。「神経診察ビジュアルテキスト」を2002年に医学書院から出版できた勢いで、共著者を求めましたが体調などで断られ足踏みしています。専門家であるほど難しさを知るせいか、沖縄には文法系参考書を書く人はいないようです。ある副校長の力添えもあり、高校参考書で有名なＫ書店の担当者からは「力作ですね。」と言われましたが、ある社は売れている従来の本を否定するので系列になじまないと言い、ある社

は指導要領が改訂期にあり参考書はそれに合わせるつもりとのこと。ある厚い英文法書の序文に、「いまどきの学生は文法を読まないから」と出版社から断られ続け自費出版になったとのこと。K書店も解説を多く求め、本書の良い例文があれば説明は最少でと違いがありました。

ただでさえ落ちこぼれがいるのに、半年や1年でできるはずがないと思う人は多いでしょう。しかし、教師の意見＊に、「入門期からやさしいが内容に乏しい英文に慣らされた生徒は、1年も終わりごろになると、英語を通して内容に興味を示すことがしだいに薄らいでいく。英語を読んで未知の情報、知識に触れる喜びがなくて（略）」とあります。3年でやっと関係代名詞では面白い話ができるはずありません。また、ある塾のホームページに「英文法が理解できない生徒などいません。英文法ができないのは、新しい文法を習うたびに前に習った文法を忘れていくから（要旨）」とあります。難しいのは間延びしすぎるのも要因です。ある教室ホームページに、「生徒の年齢に合った内容の文章を読み書きするに必要な文法にたどり着くまでに3年かかるので初めのころ英語が退屈。5ヶ月という短期間で少数の英単語を用いて中学英文法の概要は身につけられます（要旨）」と言っています。いちいち辞典を引かなくてすむ整理された教材を与えれば基本英文法はわけありません。

この作成と同時に県立病院勤務になったので暇はなく、年のせいか夜半に目覚める時間や歩きながら資料を見ています（後者は前頭葉賦活のためかとても良い）。googleで例文を検索し、米国人の義兄のチェックを受け、オーディオCDではだめなので2010年に広がりが予想されるandroid携帯に乗せようと勉強中です。幸運の女神が、専門家だけでなく、内・外の無理解（内の前に家をつけたい気分）に耐えて、捕らわれのない目で見る凡夫にも微笑むと信じています。本書が出版されると英語教育を揺るがすでしょうが、貴重な紙面をつかわせてもらって、ここで言いたいのは私が本を書いているということでなく、読者や知人の子達が非効率な英語教育を受けていませんかということです。共著者をお願いできそうな知人がいれば紹介いただけると幸いです。

＊下村勇三郎、英語教育　生徒との巡り合い、東京書籍、1998

寅の会

まちなと小児科クリニック
新垣　義清

過日59回目の誕生日が過ぎた。この歳になるとあまり嬉しくも無い。周りから「お誕生日おめでとうございます」と言われると、ニコッと笑顔で答えるが内心は違う。（お前に何の関係があるんだ、この野郎）と言いたくなる。どうも高齢期のひがみ根性が出だしてきたようだ。医師会から来年の干支の会員としてのエッセイ依頼文が来たときもやはり同じ感情だった。断ろうかと思ったが良く考えてみると次回の干支は無いかもしれない。という訳で今パソコンのキーボードを叩いている。題名は干支にちなんで〔寅〕を使うことにした。

〔寅の会〕といっても別に大酒のみの集団ではない。寅年生まれの同級生（糸満高校）の模合の名称である。ちなみに中学校の同級生の模合もやはり同じ名前だ。どうもこの年代は創造力が乏しいらしく、平凡な名前しか思いつかないようだ。結成されたのは40年近く前になるらしい。らしいというのは、私が参加したのがかなり後になってからで、当初のことは良く分からない。話によると琉大の学生だった数人が集まって作ったとのことだ。お互いの親睦を深めるとか何とか理屈付けをしたらしいが何のことは無い。単に酒を飲む口実を作りたかっただけだ。学生の身で親の仕送りを受けながら飲み会をやるのは、内心後ろめたい気持ちが少しは

あったのだろう。その後卒業してからも延々と続き、そのうちに私のように本土から帰ってきた連中も加わり、現在も20数名が毎月集まって飲んだくれている。ほとんどの場合糸満で開かれるので出かけていくのが少々億劫だが、酒の雰囲気は嫌いなほうではないのでほぼ皆出席を続けている。

以前は団体旅行に行くという目的で毎月積み立てをしていた。酔っ払っているうちに話はどんどん大きくなる。オーストラリアがいい、いやオリンピックを皆なで応援に行こうなどと侃々諤々していたが、結局行ったのは一度きり。それも国内の割安団体旅行で、冬の山陰への2泊3日の温泉めぐりだった。なるべく家族も一緒にとのことで夫婦が数組いたがほとんどは単身での参加だった。岡山空港からバスで湯原温泉へ。バスの中はまるで修学旅行。ガイドさんの迷惑を顧みず、大声で話すやら中には酒盛りを始めるのもいる始末。当然のことながら夜は大騒ぎ。温泉の有難みは無視され風呂よりも酒で、飲めや歌えやの大宴会になってしまった。翌日は二日酔いでバスの中も前日とは様変わりし、皆おとなしく行儀良く居眠りをしていた。だが宿に着くとまた元気復活。旅館の人に近くの河原に無料の露天風呂があり、しかも混浴だということを聞いてメンバーの表情が一変。夕食もそこそこにまずは宴会。ほろ酔い加減を少し越したところでやる気満々に、熱燗にした酒を引っさげて「いざ混浴へ」と出発した。しかし外へ出たとたん寒いこと寒いこと。あたりは雪が降り積もっている。それでも混浴の誘惑には勝てず皆な震えながら目的地へと急いだ。着いてみてびっくり。誰もいない。おまけに脱衣場は掘っ立て小屋のような作りで、風はヒューヒュー吹き込んでくるし目茶苦茶寒い。大慌てで服を脱ぎ露天風呂に飛び込む。少し暖まったところで持参の酒で宴会続行。風呂に浸かりながらの酒はまた格別だ。結局女性は一緒に行ったメンバーの奥さんが一人だけだった。あとは最後まで来客ゼロ。いい加減酔っ払ったところで宿に引き上げた。翌日宿の人いわく「若い人は夜中の12時ごろに行くのが多いようですよ」〔一同ガックリ〕…情報は正確に伝えてもらわないと困る。もっともあの酔っ払いどもが12時ごろまともに雪道を歩けるはずは無いが。

頭髪はサバンナの様に薄くなり腹は臨月の如く膨れていても、気持ちだけは今でも高校時代の青春真っ盛りだ。遠慮会釈の無い会話が乱れ飛ぶ。話の中身も昔は子供のこと、仕事の悩みなど健全な社会人としてのものが多かったが最近は少し違う。病気や定年後の話、ダイエットの話等々。大酒を飲みながら肝機能の心配をしているのだからどうしようもない。適当に相づちを打ちながら聞いている。「俺は3種類の薬を飲んでいる」と1人が言えば、もう1人が「いや俺のほうが多い」と飲んでいる薬の数を競い合っている奴もいる。「血圧の薬を時々忘れたりするが大丈夫か？」と聞く奴もいる。「生きている間は大丈夫だろう」といい加減に答えると、「それでも医者の言葉か？」と絡んでくる。全く始末に負えない酔っ払いどもである。とは言っても私もその集団の一員だ。自分ではまともなつもりでも、他人からは同じ酔っ払いにしか見えないだろう。〔他人の振り見て我が振り直せ〕というが、酔っ払っていてもいなくても自分のことはよく見えないものだ。〔反省〕

何やかんや言っても今年は還暦、寂しさは有れども嬉しさは無し。次回の干支の年にもまた原稿が書けることを希望して拙文を結ぶ。

今年の抱負

まちなと内科クリニック
平良　雅裕

沖縄県医師会会員の皆様あけましておめでとうございます。昭和25年生まれの寅年という

ことで私に寄稿の依頼がありました。普段から何も考えていないのでいきなり依頼されてもなにも思いうかばず、お断りすることも考えましたが、せっかくご指名をうけたのでお粗末ではありますが、原稿を書かせてもらいました。月日の経つのはなんて早いのでしょうか。今年はなんと60歳になります。うそみたいです。心は二十歳、肉体は70代後半。最近とみに体力の衰えを実感する今日この頃です。何を書いたらよいのか分からないので自分の生い立ちとこれからの抱負を簡単に述べたいと思います。中学生の頃までは普通の子供でしたが、高校生になり、対人恐怖症となり人の目を見て話をすることができず、ほとんど家族以外の人とは会話することが出来ず、日本語を忘れてしまうのではないかと思うくらいかなり深刻な状態でした。しかしどういう訳か勉強だけは嫌いではなく学校の成績だけはよかったようです。(いわゆるながら族でラジオがないと勉強できなかったです。右脳でラジオから流れる音楽番組を聞きながら同時に左脳で数学の問題を解くという器用なことが出来ていました)昔は成績がよければ医学部というような流れがあり、私もその流れにのり、親の言う通りに医学部に合格出来ました。しかし特に志しがあって医学を目指したわけではありません。しかし他人と話しも出来ないのに一人で親元をはなれ本当にやっていけるのかという強い不安があり、入学を辞退しようかと真剣に悩みましたが、結局鹿児島大学医学部に入学することになりました。大学生活は予想した通りかなり苦しかったです。しかし一緒に入学した同じ沖縄の友達、先輩たちに励まされなんとか卒業できました。彼らがいなければとても生きていくことは出来なかったと思っています。学生時代は落ちこぼれで一留し、卒業試験もほとんど不合格でみんなが医師国家試験の勉強をしている時に自分は追試をうけていました。国家試験の準備もほとんど出来ず、本当は合格できるはずがないほどの学力不足の状態でしたが、運がよかったと言うしかない。なんと合格してしまいました。昭和51年に卒業しましたが、最初は沖縄にもどり初期研修を受けるつもりでした。しかしちょうどその年から中部病院は研修医の採用に選抜試験を施行するようになりました。(これまでは無試験で研修ができていました)しかしもうこれ以上試験のための勉強は絶対にしたくないし、試験をうけても絶対に通らないと考えていたところ大学時代の元のクラスメートから誘いがあり、福岡の病院で研修が始まりましたが、人とまともに話ができない人間が患者さんを受け持つことができるわけがない。研修が大変でした。出勤拒否の状態にもなりました。しかしこの時も指導医の先生をはじめとして周りの人たちの支えがあり、なんとかきりぬけることができました。あの当時の仲間、先輩がいなければ今の自分は有り得ません。いくら感謝しても感謝しきれません。50才をすぎると神経が鈍感になったのでしょうか、人の目があまり若い頃と比べ気にならなくなってきました。人がどう自分のことを思うかそんなの関係ねえという心境にやっとなれてきているようです。しかし人生の半分を人と話が出来ない状態で過ごしたため、その後遺症は残り、今でも初対面の人にはまともな対応ができません。昭和58年に沖縄に戻り協同病院、赤十字病院　浦添総合病院、嶺井病院で勤務医として働き、さまざまな経験をさせてもらいました。これらの経験は今の自分の血となり肉となっています。一生勤務医として働くことになるものと考えていましたが、いろいろないきさつ、縁があり、H19年9月より開業することになりました。最近微力ながら地域の人たちのために何とか役にたっているのかなということを感じられるようになり、それがとても励みになりやりがいが出てきています。これからも気力、体力の続く限り一生懸命地域の人たちの健康をサポートしていきたいと考えています。今年もよろしくお願いいたします。追伸;今年はメタボから脱却するぞっ!

寅年に思う

仲原漢方クリニック
仲原　靖夫

今年、平成22年は寅年で昭和25年生の小生にとっては5回目の干支、つまり還暦である。いつか迎えると思っていた還暦がついにやってきたという拍子抜けの思いである。従って新年を迎える心境は、今年は一年の抱負というより、今後の残りの人生をどう生きるかを考えなければという少し深刻な思いである。

60歳還暦は一般のサラリーマンであれば定年退職を迎える年である。人生を四季に例えると還暦は実りの秋の収穫が終わった時期に相当すると考えられる。退職金と年金はさしずめ一年の収穫にあたり、これで冬を越さなければならないわけである。ゆっくり一年を振り返り、来年に思いを巡らすのが一般的な冬の過ごし方、特に正月の過ごし方になろうが、人生の冬には新年が来ないので、今年の還暦の機会に、大晦日までの時間をどう過ごすか考えなければならないということになる。

ところで小生は定年の時を見越したつもりで、平成13年に、生涯現役を目指してハートライフ病院を退職し、やびく産婦人科を経て平成17年に現在の地に仲原漢方クリニックを開院した。従って小生には定年はないので気力体力の続く限り診療を続ければよいと単純に考えてきた。しかし、診療は続けるのであるが、還暦ともなると『我が人生に残された仕事は何か、生きている間にしておくべきことは何か』を整理しなければならないと思うのである。

思えば自分の人生はほとんど医学のことのみを考えてきた単純な人生であった。広島大学入学直後に学生運動に揺さぶられてバックボーンの不安定さに危機感を持ち、『禅』に出会って足元を固めた縁で東洋哲学に目を向けた。その縁で東洋医学に関心を持ち、西洋医学に東洋医学を併用する医学を実践しなければ片手落ちになると考えたのであった。漢方の師小川 新先生は学生である小生に、医学の基本は西洋医学であるからまず西洋医学をみっちりやって、それから漢方を勉強しても遅くないと言われた。中部病院で卒後研修を終え、八重山病院で救急を中心とした外科診療を実践して3年、そろそろ漢方を始めようと再び広島の小川先生を訪ね、診療を見学させていただいて、手探りで漢方を始めたのが昭和57年であった。あれから27年、小川先生のように漢方で癌を治すところまではいかないが、困難な症例でもある程度は漢方的に病態のオリエンテーションがつくほどにはなった。そのまま続ければもう少しましな治療もできるだろうと思える現在である。

ところがその後もう一つの出会いがあった。漢方を勉強するには沖縄本島に出た方が良いと石垣から那覇に越して間もない昭和63年頃、広島大学の同窓会で真幸クリニックの上原真幸先生に会ったのである。ハートライフ病院に就職した頃で、それに先立って北京に出かけたとき、いわゆる超能力者といわれる人にあった話をしたら二次会に誘われた。先生は独自に『気』の研究・実践をしておられ、話が東洋医学、気功、超能力にまで及んだ。漢方の背景に東洋哲学の陰陽五行説がある。五行の木火土金水が青赤黄白黒の色、春夏土用秋冬と季節、東南中央西北の方角、39571の数字と様々な領域に適用される意味論的根拠、必然性は何か、疑問に思っていた小生には、上原真幸先生は東洋哲学の根本を知っておられる魅力的な先生に映った。二十年余対話を続けてきたのは数霊理論であった。すなわち玉として存在する数の構造が時間・空間、宇宙の森羅万象を形成するという統一理論である。例えば仏教には三十二相八十好種という言葉がある。その数の根拠が説明できるのである。原子番号が増えていく場合の構造の変化の必然性が説明できるという。先生も昨年7月に逝去され、数霊に関する多くの資料が残された。小生はこれからそれらの資料を整理し、可能な限り理解し、後世にわかりやすく説

明できればと考えている。それが自分の残された人生の仕事ではないかと考えている。今年こそその具体的な一歩を踏み出したい。

故郷石垣では八重山郡の我々の合同同期会『二五トラの会』の友人たちが成年祝いを今年五月に計画しており、沖縄本島、本土からも含めて約700名の参加が見込まれているという。49歳の生年祝いで会った友人の何名かがすでに他界したこともあり、人生の秋の終わりになって同期会もいよいよ重みを増してきた。

機械の故障と初めてのバス通勤

介護老人保健施設 シルバーピアしきな
石川 哲也

平成21年9月15日、私の47回目の誕生日に、一通の手紙が沖縄県医師会より届きました。開封してみると、新年干支随筆の執筆依頼でした。作文の苦手な私にとっては、悲しいプレゼントになりました。

大型連休（シルバーウィーク）最終日の9月23日、自宅リビングでテレビを見ながらこの原稿を作成していると、突然テレビ画面が消えました。テレビをよく見ると、電源スイッチの左側に点滅しているランプがありました。テレビの取扱説明書を参照すると、機械に異常が起きた時に点滅すると記載されていました。テレビ側面には、「1998年製」のシールが貼ってあり、これを機会にアナログテレビから地上デジタル対応テレビへの買い換えをすることにしました。インターネットを利用し、人気の高いテレビ機種を調べて参考にして、同日、近所の量販店で、ブルーレイ機能内蔵のテレビを購入し、翌日には、新しいテレビが届きました。

今度は、10月4日の日曜日、昼食準備中の妻が私の所に来て、「電子レンジの調子が悪いです」と言っているので確認すると、あたためモードにして調理を開始しても短時間で調理が終了し、表示部に「エラー」と表示されていました。電子レンジ側面には、「1990年製」のシールが貼ってあり、電子レンジも買い換えることにしました。今回も、インターネットを利用し、人気の高い電子レンジ機種を調べて参考にして、同日、近所の同じ量販店のポイントを利用して、電子レンジを購入し、翌日には新しい電子レンジが届きました。

次は、1年以上前の出来事です。平成20年11月上旬のある朝、私が自動車で出勤途中、車のエアコン送風口より白い煙が出てきました。あわててその車で修理工場へ向かいました。修理工の方に見せると、「これは車両火災寸前ですよ」と言われて驚きました。平成5年12月に新車で購入し、15年間大切に乗ってきた愛車でしたが、廃車にして新車に乗り換えることにしました。(エコカーへの新規購入に補助金が交付されると言う報道は、平成21年に入ってからでした。残念。）私は、自動車が届くまでの間、初めてバス通勤を経験しました。

出勤には那覇バス3番線、帰宅には那覇バス2番線を利用しました。出勤時は、泊高橋バス停で乗車し、識名バス停で下車しました。私の始業時刻は、午前8時30分です。午前7時20分頃に乗車し、午前7時50分頃に下車すると、遅刻せずに出勤することが出来ました。最初は、時刻表通りにバスが到着するか心配でしたが、私が高校生の時と比較すると、驚く程時刻表通りの運行でした。時々、バス停での停車時間で、時刻表通りになる様、時間調整をしていました。又、赤信号で停車中、アイドリングストップを実践している運転手さんがいて、とても印象的でした。帰宅時は、識名バス停で乗車し、久茂地の琉銀本店前バス停で下車して、徒歩で自宅に帰っていました。たまに久茂地の飲食店で夕食をすませてから帰るのが楽しみでした。

私は、今年で48歳になります。最近は、少しずつ体力が落ちてきているのを実感しています。しかし人間は、体の一部が故障したからと言って、機械（テレビ、電子レンジ、自動車

等）の様に買い換えることは出来ません。私は、これら機械の故障を通じて、定期的に健康診断を受けることと、自分の生活習慣を見直し、適度な運動を心掛けて体調を自己管理することが体力維持には大切だと感じ、今後共実行していこうと思いました。

庚　寅

がきやクリニック
我喜屋　出

あけましておめでとうございます。

今年は4回目の年男ということで、執筆の機会をいただくこととなりました。そこで、干支の話を少しさせていただきたいと思います。

ものの本によると、洋の東西を問わず輪廻転生という概念があり古文書には様々な形でその記録が残されているようです。「日本霊異記」によると「前世で子供の所有する稲10束を盗んだ父親が現世で牛に生まれ変わり、その子供が執り行った法事の席に現れ、自分の犯した罪を告白する。子供は、大声を出して泣き、父親を許すも、父親が転生した牛はその日の夕方死んだ。」との記述があります。また、岩戸山古墳に残る石人、石馬は葬られた故人の守護あるいは故人の輪廻転生の姿を現しているとの解釈もあるようです。ここ沖縄においては伊波普猷氏の「をなり神の島」で朝鮮人南島漂流記の記載として祭事の際、人形や鳥獣形を社寺に飾り付ける風習があったことが指摘されており、これも死者や祖先が再生するまで転生する動物や人間を表していることを物語っているそうです。イタリアのエトルリア地方の墓の奥壁の男女の絵図とともに描写されている牡牛の絵あるいは古代ペルシア帝国のペルセポリス宮殿入口の人面牡牛像などは死後牛に変身するという思想の流れのようです。

古来、人間の住居は山を背景としその麓には神霊の降下を迎える場としての陵が築かれました。死者の魂は死去した場所で一定の日々を過ごし、山に帰るという思想です。そして女性原理である山の神の体内に入り、月満ちて鳥獣として生れ出ます。猟師は狩猟の後必ず山の神に猟獣の内臓その他を供え、山の神の許しを請います。古代クレタ文明などではポツニア・テーローンと呼ばれた山の神がいて、ポツニアは女主人、テーローンは野獣たちを意味します。そして山の神の周辺にはライオン、鳩、牡牛、牝牛、野生山羊などが侍ます。

このように輪廻転生、山の神などという概念から人と鳥獣とは死生観を軸として深くかかわってきました。そして鳥獣は東西南北の方位に配置され、また年月の時間にあてられました。

十干十二支という概念が中国殷の時代に生まれています。十干とは10を一つのくくりとした「旬」の繰り返す始まりの日に名づけたものです。甲　乙　丙　丁　戊　己　庚　辛　壬　癸がそれです。今では月の上旬、下旬といったものがその名残です。そしてこの十干に木火土金水の五行と陽陰（兄弟）のえとが対応し和言葉の十干が生まれたのです。丙（ひのえ）丁（ひのと）などがそれです。十二支の起源は今の木星が12年を周期として天空を回ることから始まったといわれています。「事始」などでは黄帝が子・午などの十二辰に見立てて月に名づけたといわれています。子　丑　寅　卯　辰　巳　午　未　申　酉　戌　亥がそれです。ただ、鳥獣の中でなぜそれぞれがあてられたかは不明です。この十干十二支が合わさって干支が成立しました。干は幹、支は枝と考えられています。これにより60の組み合わせ（10と12の最小公倍数）ができることとなり、これを六十干支とよびます。ちなみに壬申の乱は672年が壬申（みずのえさる）、戊辰戦争は1868年が戊辰（つちのえたつ）からきており甲子園は甲子（きのえね）の年に完成したことによる命名です。

また、同じ寅年でも私の生まれ年の1962年は壬寅（みずのえとら）そして今年は庚寅（か

のえとら）となり60年後に一巡し還暦となるのです。そしてこの庚寅はどういう意味合いがあるかというと庚：万物が粛然として更まること、寅：万物が演然として初めて地上に生ずることです。昨年は日本でも政権交代がおこりましたが、今年何か新しい事象が生じるのでしょうか。六十干支の個々の意味合いは陰陽五行の中で陰陽道として発展していったようです。ちなみに庚寅生まれの人の基本性格として「陽性で明朗、世の信用も得られる性質ですが、散漫で移り気が多いので、失敗することがあります。短気を捨てさえすれば、人の長となれる旺盛な運気です。」ともありますが今年還暦を迎える諸先輩方、果たしていかがでしょうか。

壬寅の私は、12年後の還暦に向け、少しずつ未来予想図を描いていきたいと思います。地上の他の生命と共存する人としての立場をわきまえつつ「生かされている」という意識を持ち続けながら。

今年の抱負

沖縄赤十字病院
嘉手川　淳

昨年5月に入会しました嘉手川 淳と申します。ご存じない会員の先生方も居られると思いますので、まずは自己紹介をさせていただきます。私は昭和37年生まれの47歳で、那覇市松川で生を受け、松川小学校および真和志中学校に通い、中学時代には屋宜英学塾（当時）にお世話になりました。屋宜塾の同期には五十音順で、循環器科の上地洋一先生や泌尿器科の嘉川春生先生、小児科の知名耕一郎先生、消化器内科の仲吉朝邦先生、外科の西原実先生、脊椎外科の宮里剛成先生が居ります。私自身はラサール高校から大阪大学医学部へ進学し、大学卒業後は神経内科医として大阪大学および関連病院で約20年勤務しました。この間、大阪大学医学博士号を取得し、神経内科専門医およびリハビリテーション科専門医の資格を得ました。昨年4月に帰沖し、縁あって沖縄赤十字病院の新設科である神経内科部長を拝命しました。

この度、新年号の新春干支随筆の一環として、「今年の抱負」というテーマで若干の紙面をいただきました。ご存知かもしれませんが、わが沖縄赤十字病院は那覇市古波蔵での30年余りの歴史に幕を引き、今年の5月に那覇市与儀へ新築移転します。神経内科はそれに先駆けて去年の4月に開設されたわけですが、新設であること以前の問題として、神経内科が何かを知っていただくことが重要であると感じましたので、これを今年の抱負としたいと思います。

神経内科はなにを扱っているの、とお感じになっている先生方も、もしかしたら居られるのかも知れません。そう申し上げる理由のひとつには、本県の神経内科専門医の少なさが挙げられるかと思います。全国には神経内科専門医が3,000名居りますが、沖縄県は22名で平均に届きません。また、関連する他科の脳神経外科や整形外科、精神科、心療内科との重複領域のため、地域によってはその存在意義が薄れているのかもしれません。

神経内科はなにを扱っているの、という問いに関しては次のように答えるようにしています。まず症状としては、頭痛やめまい、痙攣発作、しびれ感、麻痺などがあります。次に疾患としては、脳梗塞や脳出血、アルツハイマー病とその他の認知症、てんかん、パーキンソン病、脊椎症によるしびれ感や麻痺などがあります。さらに神経難病もその対象で、絶対数は多くありませんが、神経内科が専門性を発揮する重要な病気です。神経難病には筋萎縮性側索硬化症や様々な原因のパーキンソン症候群、脊髄小脳変性症、舞踏病、多発性硬化症、重症筋無力症、進行性筋ジストロフィー症、多発筋炎などがあります。

全国の患者数から見ると、頭痛や脳卒中、認知症、てんかんなどはそれぞれ100万人以上の、いわゆるcommon diseaseであり、パーキンソン病やニューロパチーなどは5万人以上の中間群、神経難病などは5万人未満のrare diseaseです。

神経内科では、上記症状や疾患に対して画像診断や神経生理学的検査を行い、診断や治療に役立てていきます。また必要に応じて関連する脳神経外科や整形外科、精神科、心療内科などへご紹介します。

沖縄赤十字病院神経内科は前述の通り、平成21年4月に開設された最も新しい科です。現在は一名の常勤の専門医のみですが、脳神経外科と共同で診療に当たることを目的とした脳卒中センターも同時に新設されました。脳卒中センターは脳血管疾患を超急性期から診療することを目的に設立されました。また脳血管疾患以外にも、てんかん発作や髄膜脳炎、脊髄炎、ギランバレー症候群、血管炎による神経障害などの急性発症脳神経疾患に対応しています。

以上、自己紹介と施設紹介、神経内科の紹介をさせていただきましたが、地域医療機関の先生方からの患者さんのご紹介をお待ちしています。

今年の抱負

沖縄県立宮古病院
吉川　仁

会員の皆様方、あけましておめでとうございます。県立宮古病院精神科の吉川仁と申します。はじめましての方も、以前から私を知っている方も、本年も宜しくお願い申し上げます。

本年の干支は寅ということで、寅年生まれの会員である私に新春干支随筆の依頼がありました。文才のない私がこのような随筆を書くというのはとても気がひけますが、開き直って思いつくままに書いてみたいと思います。

2009年4月より県立宮古病院に赴任しています。宮古の文化に少しは馴染めたかと思いますが、まだまだ知らないことばかりで戸惑うことも多々あります。そもそも私は父が長野県、母は沖縄県の出身でいわばハーフなのですが、育ちは沖縄です。しかし沖縄で育っておきながら、うちなーぐちはしゃべるのはおろか聞くこともままならず、おじーやおばーが話していることはまるで外国語のようです。当然みゃーくふつ（宮古の言葉）も全くわからず、毎日困っています。とは言うものの、みゃーくふつに関しては地元の人すらわからない言葉もあるようで、そういう意味でもとてもディープなところだな、と思います。そのような私ですから、少しでも沖縄の文化に触れようと、2年ほど前に三線を習ったことがあります。三線を弾くことが出来るようになれば、少しはうちなーんちゅっぽくなれるかなと思ったのですが、元来音楽の才能が全くないので、すぐに挫折してしまいました。今年こそは練習を重ねて、せめて人に聴かせられるようになりたいです。

仕事に関しては、次年度も宮古病院に勤務することになれば離島の精神科地域医療をもっと考えていきたいと思います。現段階でも宮古の精神科地域医療は頑張っていますが、もっと地域で患者さんを支えられるような地域力を育むお手伝いが出来ればいいなと考えています。でも私はそもそも怠け者でかつ大したことは出来ないので、他の精神科の先生方のお力に頼って頑張っていこうと思います。

以上、あまり長々と書くとますますつまらぬ文章を書いてしまいそうなので、ここら辺でやめます。今年の抱負をもう一つ追加しますと、もう少し気の利いた文章を書けるように、まじめな本をたくさん読もうかと思います。

今年の抱負

琉球大学医学部附属病院
光学医療診療部 金城 渚

今年の予定としては、前半は学会一色となりそうです。学会事務局担当となりましたので、先ずは学会の案内をいたします。

消化器系の総会では、沖縄初となる第49回日本消化器がん検診学会総会（会長：琉球大学医学部附属病院光学医療診療部部長金城福則）を2010年6月11日（金）12日（土）に沖縄コンベンションセンターにて開催します。現在、鋭意準備を進めているところです。

本総会のテーマを「適切な消化器がん検診の更なる向上のために」としました。近年、わが国において格差社会が問題となっています。わが国であればどこに住んでいても「消化器がん検診」を受ける機会が平等にあることを願い、会長自ら打ち出しました。

科学的根拠に基づいた医療の実践は重要なことですが、経験のみに基づいた医療を必要としている地域があることも忘れてはならず、がん検診を実施する行政や検診機関の立場からだけではなく、国民の立場からがん検診についても考えて頂きたいという思いです。

がんで苦しむ方々を少しでも減らせるように、地域に即したがん検診を多くの人たちに受けて頂くことを目指しています。そのための討議の場をワークショップ、シンポジウム等で取り上げました。

また、発症予防から治療にいたるがん診療の全過程を念頭においた検診となるよう、特別講演2題、教育講演3題を組み入れました。がん検診の普及に関しては市民公開講座を開催し、多くの市民にがん検診の重要性を理解して頂き、受診を呼びかけたいと考えています。医師会会員の多くの先生方、ならびにコメディカルの方々の参加をお待ちしております。

学会ホームページ（http://www.okinawa-congre.co.jp/49jsgcs）に詳細がございますのでアクセス頂けましたら幸いです。

もう一つの計画は、ラオス訪問です。

われわれが携ってきたラオス国セタティラート病院改善プロジェクト（L-J SHIP）について説明します。プロジェクトの超上位目標にラオスにおける消化管内視鏡検査を一般化し、医療の資質向上による死亡率の減少を掲げ、プロジェクト目標のセタティラート病院（SH）の消化管内視鏡検査業務およびその研修機能を向上させることで、患者が適切な医療サービスを受け入れることを上位目標としました。

01年度にSH内視鏡部門を立ち上げ、ラオスにおける医療・教育機関としてのモデルとすることを当面の目的としました。プロジェクト以前には、内視鏡検査が可能な施設はラオス全土で2施設のみでした。内視鏡機材・周辺機器・処置具・薬品は無く、正に“0ゼロ”からのスタートでした。内視鏡従事者（医師3名、看護師3名）へは内視鏡の構造解説、基本的な取り扱い法、消毒法、咽頭麻酔法、救急時対応のレクチャー、内視鏡教材作成、検査マニュアル作成、検査記録用紙作成、検査記録・管理、病理標本簡易固定法の伝授、検査料金の設定、医師に対しては上部消化管の食道挿入法を、まさに二人羽織状態で指導しました。

02年度に電子内視鏡が導入され、内視鏡画像を供覧可能となり、より細かい指導ができるようになり、03年度には、ビエンチャン近郊の医療従事者を集い消化器内視鏡セミナーの開催を行ないました。04年2月には、ラオス国ルアンプラバン県立病院での出張内視鏡検査も実施しました。プロジェクトは04年9月で終了しましたが、05年2月には琉球・アジア太平洋医学交流協会の研究基金によりSHを再訪問し、内視鏡技術の指導を行いました。

09年9月の時点でこれまでに、上部消化管内視鏡を5,000件以上、下部内視鏡を900件以上、ラオス人医師3名のみで行ってきました。

現地へ出向き今後も彼らへの技術支援を続けていきたいと考えています。

寅（虎）年の復活

中頭病院
下地　勉

年男だそうである。1962年12月生まれの寅年（正確には庚寅（かのえとら）を迎えた）。

今まで自分の過ぎし日々のことを振り返ることは殆どなかった。この4回目の干支の機会に、過去3回を少し振り返ってみたい。

1974年、小学6年生。その2年前に沖縄は本土復帰し、通貨がドルから円に変わった。小学入学以来、算数の教科書は円で計算を習っていた。復帰当初、ドルの紙幣に比べ（絵柄が）頼りなさそうに見えて妙な違和感があった円が、教科書に出てくる通貨と同じであることに、次第に安心感を覚えていた。

1986年、大学6年生で医学部の最終学年、部活も引退し、いよいよ国試を控え、いやでも緊張感が高まっていたことを思い出す。振り返れば当時はバブル経済の真っ只中で、友人の就職も、銀行、証券会社、一般企業などが多く、公務員はその次の選択という風潮であった。いまから考えれば、夢のような就職戦線である。音楽シーンは、あのマイケルジャクソン、マドンナが席巻していた。

1998年、大学を離れ、現在の職場に就職していた。家庭を持ち、2人の子供と過ごすのが一番の楽しみであった。気力はいざ知らず、体力は一番充実していた（と思う）。元来スポーツは見るのも、するのも好きだった。あるきっかけで始めたゴルフであるが、この頃はのめりこんでいた。車の運転中、ハンドルを握れば、理想の“グリップ”を求めて左右の手は落ち着かなくなり、多くの「医学書以外の文献」にもあたって、理論構築に励む日々だった。

さて順調に見えていた“ゴルフ修行の身”にある日から変調が現れた。スイングのトップの位置で右肩が妙に引っかかるのである。それは徐々に存在感を増し、とうとう1年ほど右肩に居ついた。そう、肩関節周囲炎（いわゆる四十、五十肩）である。この時は、何とかスイングはできるので、ゴルフを止めるというほどのことはなかった。しかし、この厄介な病はなんと左肩へ移動してしまったのである。左にくるともうだめである。ゴルフ談義で、スイングは右腕と左腕のどの腕が中心かという議論があるが、正解は左腕である。肩関節周囲炎について改めて調べてみた。数多くある解説の中に「四十歳から五十歳代を中心に起こる肩関節周囲の炎症で、一種の加齢現象」という記載を見つけた。まだまだ体力に自信があっただけに、少なからずがっかりである。肩関節周囲炎は、日常生活には大きな支障はないが、スポーツをするには厄介な状態で、英語の「Frozen Shoulder」の表現がぴたりとくる。この疾患は外来診療で時々みることがある。辛い（幸い？）この経験がものをいい、問診、理学所見、治療法、予後の説明と、流れるような？診療風景である。診療の最後に、六十歳代の女性には“五十肩です”、五十歳代の男性には“四十肩です”と告げて、患者さんから深く感謝されている。結局、肩関節周囲炎の罹病期間は、右肩1年＋左肩2年の合計3年間に亘り、その間2年間はゴルフ休止である。しかしこのところ痛みはほぼ完治し、再開の時期を探っている。

さてゴルフ界の寅（虎）といえば言わずと知れたタイガーウッズである。彼は昨年、膝の手術から見事に復活した。こちらは猫のような虎ではあるが、2010年、この寅（虎）年に華麗に復活するのを密かに期している。

寅年に因んで

とおのくら整形外科
砂川　憲政

会員の皆様新年あけましておめでとうございます。今年が、皆様にとって良い年でありますよう祈っております。

私は、昭和37年（1962）寅年の生まれ、平成22年（2010）は寅年ということで、今回にて4回目の年男です。

次回もう一度の干支平成34年（2022）を迎えると還暦を迎えることになることを考えると時間の流れを考えさせられます。

平成元年医学部を卒業し、今年で医師として22年目となります。

琉大医学部卒業後に整形外科医局へ入局し大学病院および関連病院にて医師としての知識や技術を取得させていただき、そして平成20年4月に開業しました。

平成22年3月には、満2年経過することになります。

開業医としての仕事は、通常の患者さんの診療や治療に加えて医療経営やスタッフ教育などにかかわっていかなければならず、勤務医時代とは業務内容が大きく変わり、自分自身が勉強していかなくてはいけないことが多く大変ではありますが、楽しくもあり新鮮でもあります。

医療経営を考えるようになると自然と政治状況や医療制度を考えることが多くなります。

平成21年1月にアメリカ大統領が、「Change」「Yes We can」を掲げたオバマ氏へ変わり、同年8月日本の衆議院選挙にて民主党が圧勝し長年政権を担当してきた自由民主党から民主党へと政権交代がなされました。

新しく政権を担当した民主党は脱官僚政治主導を掲げこれまで自由民主党が行ってきた政策を大幅に変えている状況です。

医療制度や診療報酬の改定も新しい政権下で変化していく可能性があり注目していく必要があると思います。

話はかわりますが、開業後運動不足解消のため勤務医時代にしていたテニスを再開しました。平日は忙しくて時間がとれないため週末の日曜日を利用して小学校高学年～中学生（現在中2中1小5）になる3人の息子たちを説得しテニスをさせ、その練習相手として自分の練習を行っています。当初テニス経験のある私がテニスラケットの握り方からボールの打ち方まで手取り足取り指導し、何とか形となる練習試合をして満足していました。

テニスを開始して1年が経過すると興味を覚えた息子たちはテニススクールや学校のテニスクラブへ入部し本格的な練習を開始しています。

子供の成長は早いもので特に現在中2の長男にはサーブリターンとも打球にスピードがあり私のレベルを遥かに超え練習試合で勝つことが難しくなっています。

子供の成長を確認しうれしくもあり自分のレベルを確認し悲しくもあります。

しかし中1小5の息子たちは熱心に練習するも、まだ私のレベルには達せず、私を頼りとして練習試合に喜んで付き合ってくれています。

今年も楽しみながら健康維持と子供とのコミュニケーションの一つとしてテニスを続けていきたいと思います。

最後に今年は開業して3年目突入となります。地域の医療を担う医療機関として患者さんへ最良の医療が提供できるよう今後とも体制を整えていきたいと考えています。

そのためには患者さんとのコミュニケーションを十分とり、スタッフ教育を行いながら自分自身も成長していけるように自己研鑽を積んでいきたいと思います。

寅年にCHANGE

沖縄県立中部病院産婦人科
高橋 慶行

新春あけましておめでとうございます。

これまで、あまり年のことや干支のことなど考えずに生活してきましたが、今回新春干支随筆を書くように依頼され、少しこれまでのことを振り返ってみました。私が大学を卒業して医者になり、県立中部病院で研修するために沖縄にやってきたのが、24歳の時なので、ちょうど干支を二回りしたことになります。考えてみるとちょうどこれまでの人生の半分が医者になってからということになり、何か大きいな節目のような気もしてきます。社会に目を向ければ、先の衆議院選挙でずっと政権を担当していた自民党が大敗して民主党に変わったし、米国では黒人初の大統領オバマ氏が誕生したし、マイケルジャクソンが亡くなったし（ダンスフリークの私としては、このインパクトは何よりも大きい）、これは世界がCHANGEの時期に来ているとしか思えない気がしてきます。医療の分野でも医師不足等の問題が噴出し、変革を求められています。そもそも私が勤務している県立病院自体、大きな変革をせまられており、のんきなことを言っている場合はありませんでした。

ではこのような時代に自分はどうCHANGEしているのか考えてみると、これまではもっぱら臨床と研修医の教育に携わってきたのですが、最近は産婦人科領域でもサブスペシャリティの専門医制度ができ、資格を得たり維持するには論文や学会参加が必要で、アカデミックな活動が確かに前よりは増えています。また県立中部病院ががん拠点病院に指定されたためその関係の仕事も増えています。やはり時代や年齢が進むにつれ仕事の内容はCHANGEしていくわけですが、肉体の方も（気持ちは若いつもりでも）遠視が入ってきたり、当直明けの回復が遷延したりと確実にCHANGEしています。仕事の変化は最初のうちはめんどうだと思っていたのが、慣れてくるとこれまで見えていなかったものが見えてきて楽しくなっています。肉体の変化（老化！）も最初は少し悲しかったのが、だんだん変化を楽しめるようになっています。ダンスに至っては肉体の衰えとの闘いのために練習しているようなものですが、マイケルジャクソンも50歳で復活コンサートを行おうとしたのですから、まだまだ老け込むわけにはいきません。それはさておき、最近は時代の変化が早く、企業なども変化し続けないとつぶれるようで、これからは、病院も医師もヒトも常にCHANGEし続けないといけないのだろうと思います。医師会会員の皆様、今年はCHANGEを楽しみましょう。

今年の抱負

とよみ生協病院
高嶺 朝広

新年あけましておめでとうございます。

とよみ生協病院の高嶺朝広です。私は昭和37年生まれの寅年、今年48歳になります。

昨年は私にとっては始まりの年でした。

①昨年6月から開院したとよみ生協病院の院長を担わせていただいたこと。院長といっても当院には前沖縄協同病院の院長だった西銘先生もおられるのですが、世代交代ということで当院医局では最年少の私が院長に指名されたのだと思います。

②沖縄民主医療機関連合会の副会長に。

③沖縄医療生活協同組合の理事に。

上記①②③は職場での役職です。

④保険医協会の副会長を担わせていただきました。これは今期の仲里会長が私の研修医時代

の指導医でもあったため、すこしでもお役に立てればと思い引き受けた次第です。

理事もやったことがないため、何が何だか分からない状態です。歯科の活動のほうは活発ですが医科の集まりは2009年から隔月で開催されるようになりました。

⑤医師会のA会員になったため、南部地区医師会の豊見城班に参加出来るようになりました。豊見城班の班長の椎名先生は私の研修医時代の整形外科の指導医でもあり、非常に班員の出欠に厳しいです。よっぽどの理由がない限り班会に欠席することはあり得ません。たまに班会の2次会に椎名先生と一緒に行くこともあります。先日はpino's placeというジャズのライブハウスに行ってきました。女性のジャズボーカルが私にはとても気持ちよくて病みつきになりそうです。椎名先生にはいろんなこと教わっています。

⑥子供の小学校のPTA役員（クラスの副委員長)。これは年度最初のPTAの集まりに妻の代わりに参加したら、だれもPTAの役員を引き受ける人がいなくて、微妙な沈黙が続きました。仕方がないので担任の先生が、その日の参加者全員を副委員長にしてしまった。ただし学級PTAの委員長はなし。年度最初のPTAは恐ろしい、それで参加者が少なかったのか。子供は末っ子で小学6年であり、これが最初で最後のPTA役員なので、妻ではなく私がPTA役員になることにしました。最初の仕事は小学校のお祭りでのカレー作りでした。私はカレーが焦げ付かないように2時間ひたすらにかき混ぜる役割でした。当直明けの午前中カレーをかき混ぜ午後の便で出張、結構ハードな日々を過ごしました。

⑦夏期臨床研究ワークショップに参加しました。これは琉大の臨床薬理学の植田教授が中心になって開催されたワークショップで、目からうろこが落ちることばかりの経験でした。ワークショップなのでその場で初めて会ったグループメンバーと1週間かけて研究デザインをつくりました。今年はこの研究に是非とも着手したいと思います。

さて、今年の抱負は昨年の始まりをうけて、一つ一つを充実発展させていくことです。

とよみ生協病院は昨年開院したばかりで、まだ経営的にも安定していないため更なる改革が必要です。特に透析室の新築移転の問題を中心に取りくむ予定です。

昨年透析室のリニューアルを予定していましたが、透析患者会が当初予定していたリニューアル案に難色を示したため、今年再度患者会と透析室のリニューアル案を一緒に検討することになりました。当院は医療生活協同組合の院所でもあり、やはり利用する患者さんが主人公なので一旦リニューアル案を白紙に戻し時間がかかったとしてもよりよい施設を一緒に作り上げたいと願ったのです。

また上記のように役職をいくつか引き受けたのですが、まずはスケジュールを調整して会議に参加することを目標にします。そして会議で出た事案に対して誠実に応えていきたいと思います。

昨年一年うまくいかないことも多々ありました。その度に上司・先輩・同僚・スタッフの協力で乗り切ったり、また問題を今年に持ち越したりしてもいます。今年も更に様々な出来事が当然あると思いますが、高橋佳子師著の「calling 試練は呼びかける」を座右の銘にして、試練を呼びかけと受けとめ応えていきたいと思います。そのためにまず私自身から変わっていかねば！

皆様今年もよろしくお願い申し上げます。

寅年に因んで

南部徳洲会病院
田中　貴俊

「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」生まれて二度目の干支男となった年の正月に、今は亡き祖父から贈られた名言です。失敗を恐れず困難に立ち向かえ、とでも教えたかったのでしょうが、その後も時流に逆らう術を知らず、何度目かの寅年を迎えます。

当時、実家の座敷には虎の掛け軸があり、目玉が大きく光っていて、夕暮れ時に見ると恐怖を覚えていました。もし、出てきたら？一休さんだったら？等と寅年生まれの性格としては、大変小心者でした。今なら勇気を出して、その掛け軸を「何でも鑑定団」に出品することだろうと思います。

「虎は死して皮を留め、人は死して名を残す」寅年生まれで、歴史に名を残す人物を探してみると、西洋ではコロンブス、マルコポーロといった冒険家達が見つかります。そして日本には、戦国の世に終止符を打った徳川家康がいます。また、情熱の歌人と呼ばれた与謝野晶子もあげることができます。さらに、まだ亡くなってはいませんが、ビートたけしも寅年生まれだそうです。

「フーテンの寅」こと車寅次郎を演じた渥美清は、寅年生まれではありません。「男はつらいよ」最終作の舞台となった奄美大島へは、診療応援に行っていたことがあります。いつも利用していたビジネスホテルには、山田洋次監督の写真が飾ってありました。個人的には、寅さんよりもマドンナ役の女優さんの方が好きでした。全四十八作中で最もマドンナ役が多かったのは、浅丘ルリ子です。旅回りのキャバレー歌手という役柄で、沖縄が舞台となった第二十五作も、そして最終作も彼女がマドンナでした。

「白虎」中国では、四神の一つです。四神とは中国神話に登場する、世界の四方向を守る聖獣のことです。東の青龍、西の白虎、南の朱雀、そして北の玄武がそれにあたります。そういえば、日本史の時間に平安京は、風水師の助言を受け、前述の四神が揃う土地に決めた、と習った記憶があります。もっとも、最近は白虎といえば、動物園で人気のホワイトタイガーでしょう。私の実家がある福岡県の動物園でも、見ることができます。百獣の王ライオンほどの力はなく、チータほどの俊足もなく、ヒョウのように木登りもできない、何となく控えのピッチャー的存在であった虎ですが、今や人気急上昇中です。

「白虎加人参湯」昨年十一月には沖縄で、日本小児東洋医学会が開催されました。沖縄では漢方講演会・懇話会が定期的に行われているので、可能な限り参加させていただいています。インフルエンザに麻黄湯程度の知識しかありませんでしたが、他に大青竜湯や、柴葛解肌湯などの処方も知ることができ、多くの収穫を得ました。ちなみに、白虎加人参湯の構成生薬は、石膏、知母といった強力な静熱剤と硬米、人参、甘草といった滋潤剤からなっており、「乾いて熱」を目標の証とし、口渇や身体灼熱感に使用するそうです。

「張り子の虎」で終わらないような一年にしたいと願っています。当たるも八卦当たらぬも八卦の占い本を、本屋さんで立ち読みしました。それもよく読まれている十二星座占い、血液型占い、タロット占いではなく、干支占いです。それによると今年の寅年生まれの運勢は、大胆な反面、運任せのところがあり五分五分、だそうです。

やっぱり強面で、威風堂々としているように見える虎も、所詮はネコ科の動物なので、基本的には臆病なのかもしれません。お酒が入ると、「大虎になる」人は少なくないようですが、ここはやはり、正真正銘の虎になりたいと年の初めに思う私でした。最後になりましたが、医師会会員の皆様のご健康と、ますますのご発展を祈念しつつ、ペンを置かせていただきます。

2010年をむかえて

琉球大学附属病院放射線科
戸板　孝文

明けましておめでとうございます。

今年で私は48才になります。このごろ確実に肉体の老化を感じます。気がつくと字の細かい印刷物は手をのばして読んでいるし、反面、学会場ではスライドの文字がまるで見えず、最近は前方座席が指定席です。次男はまだ4才、仮面ライダーごっこはかなり堪えます。仕事と育児の両立は大変です。休日は朝寝できずに起きてしまいます。ますます人の名前が思い出せません。

ここに来て、自分が放射線治療を仕事として選んだことを、つくづく正解であったと噛み締めています。50を目の前にした中年（初老？）が、年甲斐も無く毎日わくわくしながら充実感を感じているのは、単に私が馬鹿なだけかもしれませんが、すごいことだと思いもします。厚労省の研究班など中央の活動に参加する機会がとても増えました。そこで同じ世代の放射線治療医が同じく「生き生きしている」のを見て苦笑いをしてしまいます（皆も○○なのか）。

そもそも自分が放射線治療に興味を持ったのは、「メジャー」の外科や内科の先生に上から目線で見られながらも（私が研修医当時の印象です。今は全然違いますので誤解なきよう）、こっちでもちゃんと完治してしまう患者さんがいる、面白さ（痛快さ）でした。しんどい思いをしなくても（自分も、患者さんも）、結果が同じで良ければよし。もともとへそ曲がりの自分にぴったりでした。ニッチ産業という言葉を聞いたとき、ああ、今の自分はニッチなのだ、と目からうろこでした。こんな自分が重宝されるのもニッチのおかげだと。人が少ないから競争がないんでしょ、と陰口をたたく人もいるでしょうが、本人は十分に楽しく、またその結果よい仕事ができて（？）社会貢献できて（？？）、患者さんにも満足してもらえるのであれば、大成功だと思っています。ニッチ市場には、「だれも気がつかなかったけど、実は市場規模はとてつもなく大きい」ものが潜在しているといいます。放射線治療はまさにこのタイプのニッチだと密かに確信しています。患者さんの高齢化、情報の開示と啓蒙、治療技術の急激な進歩とエビデンスの集積、形態と機能温存による高いQOL、そして高いコストパフォーマンス（患者さんにも病院にも）、今後「メジャー」の診療に化ける高い可能性を秘めています。

今後自分に与えられた大きな目標は、この放射線治療の面白さを学生や研修医に伝え沖縄県の放射線治療専門医を一人でも多く増やすこと、そして更に良質な治療を患者さんに提供していくことだと、自分にいいきかせています。これから還暦まで、ますます年甲斐もなく、仕事馬鹿でばたばたやっていきたいと思います。これからも引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。

48歳雑感

北中城若松病院
涌波　淳子

医局で雑談中に「医師会から年女の原稿依頼が来てね」と何気なく話した時、ある先生が、「エッ、先生って・・・」と言いかけた。彼は、その言葉を飲み込んで、別の言葉を使ったのだけど、私の耳には、「そんなに年だったの」と聞こえた気がした。私自身がそうだったように、30代の彼にとって、48歳というのは、もう、かなりの年配、おばあちゃんに足を踏み入れるぐらいの年齢に感じるのだろう。（サザエさんのお母さん、舟さんの年齢は、48歳の設定らしい・・）実は、私自身も自分の実感と暦

年齢とのギャップに戸惑っている。

しかし、先日、育児休業中の女医さんが、赤ちゃんを連れて遊びに来た時、今までとは、感覚が違うことに気づいた。そう、今までは、赤ちゃん連れの女性に対し、「ちょっとした先輩」「子育てを経験したお姉さん」のような気持ちで接していたはずが、今回、この赤ちゃんを抱いた時、自分自身が「おばあちゃん」の立場で話しているような気がしたのだ。

昨日、今日、明日　いつの間にか1週間がたち、月が替わり、あっと言う間に年が改まり・・気づいたら、48年。確かに、白髪を染めたり、老眼鏡も購入したりと身体はしっかりと年相応になっているものの、「40不惑」を超えてもまだまだ毎日惑ってばかりで、精神が追いついていないかと思っていた。しかし、今回の件で　改めて振り返ってみると、いつの間にか、気持ちや物の見方は、少しずつ、「人生の次のステージ」に移ったような気がする。

先日、ある講演会で、「誕生から20歳までは、生物学的に『ヒト』として成長する時期。20歳から40歳は、『社会人』『職業人』として成長させてもらえる時期。40歳からは、成長した事を生かして社会に還元する時期。」という話を聞いた。私にできる「還元」とは何だろうか。人は、「受けたもの」があるから、「還元」できるのだという。この48年間の間に、私が「受けた多くのもの」の中から、今の私が「還元できる事」は、何？

一つは、神様から授かった二人の息子が、しっかりとした社会人になるまで育てる事。「子を持って知る親の恩」。一人の人間が自分の足で立ち生活し、そして、社会に出て行くまでには、どれほど多くの愛（手も心も）を受けてきたことだろう。両親だけではなく、その両親を支えてくれた多くの方々の愛によって、私は、ここまで成長させてもらった。今度は、私自身の番。自分の息子たちだけではなく、同じように子育てしている方々のサポートもしていきたい。

二つ目は、高齢者医療の大切さや喜びを伝えること。私が高齢者医療に足をいれたのは、35歳。義母が脳卒中後、重度の意識障害となった事がきっかけであった。右も左も分からない私に、神様はすばらしい先輩たちを与えてくださった。急性期の医療と異なり、高齢者医療に、華々しさはない。しかし、人生の集大成の時期に関わる医師としてのやりがいも喜びも苦悩もあることを教えてくれた先輩たち。私自身もまだまだ発展途上であるが、先輩たちの志を繋いでいきたい。

三つ目は、女性医師支援。仕事と家庭の両立の中で、教授をはじめ、多くの方々に迷惑をかけ、助けてもらった。そして、今、管理職として、違った視点で見えていることもある。自分のこの経験と現在の役割を通して、管理者と女性医師を繋ぐことができればと思う。

30代の頃、50代でバリバリ働いている方々がまぶしく見えた。あの頃の私は、新人研修で「輝く50代をめざして」と話していたが、その50代に近づいた今、私の目の前には、老いてもなお輝いている70代の先輩方が現れた。今日からは、輝く70代をめざして、一日一日を大切にしていきたい。

新年にあたって

沖縄県立北部病院 産婦人科
金城　忠嗣

あけましておめでとうございます。県立北部病院産婦人科の金城忠嗣と申します。

今年の干支は「寅」。県医師会広報委員会より、新春の会報に恒例の年男にちなんでの抱負、近況報告を、とのことで原稿を依頼されました。

私は、平成11年に自治医科大学を卒業し、3年間初期研修を受け、2年間南大東診療所におり、それから産婦人科を専攻しました。北部病院に勤務する前は4年間県立八重山病院におり

ました。

趣味はバスケットボールです。八重山病院勤務の時にイカとかんぱちの釣りもおぼえました。

北部病院のある名護は、歴史のある街並み、きれいに整備された公園、少し足をのばせば緑豊かな自然があり、とても素晴らしいところです。

私は平成21年4月に北部病院に着任いたしました。北部病院は、産婦人科医不在で平成17年4月以降産婦人科を休止していましたが、平成20年11月から4人体制となり、分娩、救急も再開しました。しかし、平成21年4月に2人、10月に1人退職され、現在は産婦人科2人体制です。

北部医療圏には2つの産科開業医があり、正常分娩はほとんどすべてそちらで扱ってくれており、正直申しましてとても助かっています。

北部病院には合併症妊娠などハイリスク症例だけとなりますが、小児科をはじめ、麻酔科、外科、内科、皆さんに支えてもらっています。他科の先生方も過酷な状況にありながら、いつも気持ち良く協力していただき、頭が下がる思いです。

まずは、今日、この日を病気もなく、日々忙しく元気で仕事をさせていただいていることに感謝したいと思います。またこれからも、自分に与えられた役割を全うできるよう、頑張りたいと思います。

あらためて新年を迎えるにあたり思うこと、というのは実はとくにないのですが、常に意識していることはあります。それは、自分を見つめなおすことです。

私が影響を受けた本があります。渡部昇一著“「人間らしさ」の構造”です。家に置いてあったのを何気なく拾って読みました。

「機能快」という概念があります。自分の中にそなわった能力を発揮させることは快感である、というのです。潜在している能力は使われることを欲していて、そしてその要求が満たされると快感が生ずる。たとえば、スポーツをして汗をかくと何とも爽快な気持ちになるのは筋肉や臓器が元来持っている機能のために用いられるからであり、スポーツをやりたいと思うのは内なる声である。潜在している能力を発揮するのは自己実現である、というのです。

ほかにも、精神的機能快としては美しさを認識する力、おかしなことを笑う力、遊びを楽しむ力などいろいろある。美しいものに感心し、おかしいことを笑い、楽しく遊ぶということは精神の本来の能力を機能させていることなのであって、それは人間の心を正常に保ち、また成長させるもととなるものなのであるそうです。

「機能快」という概念から得たものは、自分が「快」である、と感じることの中に自分の成長、能力を発揮するヒントがあるのではないか、ということです。

今後の成長、自己実現のために、じっくり内なる声に耳を傾け、何が自分に鋭い喜びを与えるか、を内省することから始め、日々の診療に生かし、今後の人生の指針にしようと思います。

爆発しそう？
したい寅年に

琉球大学医学部小児科
長崎　拓

寅年をキーワードにパソコンで少し調べると、「寅年は西暦年を12でわって6余る年である」「寅年は戦争（1914年　1950年）と火山噴火（1962年　1986年）が起こりやすい」「寅年生まれは衣食住には不自由しないが、引っ越しも多い云々」いろんなことが書いてある。その中に「寅年現象」という政治に関する記載があった。寅年に行われる参議院選挙の投票率が例年に比べ上昇する現象のことである。命名は朝日新聞記者の石川真澄さんによるらしいが、具体的には以下のようである。「1947年に参議院選挙と統一地方選挙が同年に行われて以降、4年に1回の統一地方選挙と3年に1回の参議院選挙の最小公倍数である12年毎に2

つの選挙が同年に行われそれが寅年にあたる。寅年の参議院選挙は翌年に統一地方選挙を控えており、地方政治家たちは自分と距離が近い人物が参議院議員になることができれば、来年の統一地方選挙で自分たちが勝利しやすくなるため、参議院選挙で力を入れて運動をするようになる。地方政治家たちが参議院選挙に力を入れることによって、参議院選挙の投票率が上昇するとされる。」昨年夏の政権交代という歴史的事実が記憶に新しいが、今みんなは新しい政権に閉塞感漂う現状打開、オバマ大統領で言う「Change」を期待している。今年の参議院選挙の「寅年現象」がより顕著になると思われる。

さて私自身は2000年（平成12年）に琉球大学を卒業し小児科医として今年で数え11年目にさしかかり、職場では一般的にいう中堅辺りに足を踏み入れようとしている。自身の卒業時点の研修体制が不変であれば、後に続く後輩が多少なりとも期待できていた（現状はとても寂しい）。しかし平成14年から導入された新研修制度に飲み込まれ、その期待は裏切られ、現在も所属組織においてキャリアは下から数えた方が早い。絶えず新人が加わり成長を続ける組織が懐かしくまた憧れにさえなっている。人間は動物であり嫌なことから逃げるものだが、学生が逃げる嫌な要因がおそらく大学には他の病院に比較して多いのだろう。臨床・研究・教育のうち他の病院と異なる最大の特徴は研究の存在だがそれが主要な原因だろうか？いやそうは思わない。自身もそうであったが、卒業間もない頃は一日でも早く多領域にわたる臨床能力の習得が優先され正直研究は全く頭になかった。だが当初の目標がある程度達成されると、疑問に思うことへの明確な解を求める知的好奇心が芽生えていることに気づく。卒業時点で明確な研究目的を持って即座に研究開始ができる人はすばらしいが少数派と思われる。初めから臨床・研究・教育に全力を挙げる必要に駆られることなく、時間経過のなかで順次可能な時期に挑戦するくらいの気構えが大切だと思う。

昨年4月から自身は琉球大学大学院医学研究博士課程（社会人枠）に入学しているが、強い希望というより先輩に勧められてといったほうが正直な所だ。その誘いに最終的に従ったのは自身の中に知的好奇心の存在を自覚していたからだ。その対象は「未熟児網膜症の発症機序」である。当教室教授の専門領域が小児における生活習慣病・肥満・高脂血症であり、興味あるテーマと癒合する形で「未熟児における体重変化と網膜症の発症」が現在のテーマである。分子生物学的知識や技術を持っておらず、専ら日々の診療で得られる生体情報を研究材料とした臨床研究である。昨日ある先輩と酒を飲みながら近況について話をする機会があったが、「夢を持ちそしてそれを語ること。夢に魅せられて学生は動く」という話にヒントを見たような気がする。

火山噴火や戦争が起こりやすく、「寅年現象」なる政治現象も見られる寅年。共通するのは蓄積したエネルギーが一気に爆発することである。寅年生まれの自身も漫然とした閉塞感漂う現状の変化につながる形でエネルギーを爆発させていきたいと思う。

今年の抱負

北部地区医師会病院
仲村　究

新年明けましておめでとうございます。小生の様な若輩者に新春干支随筆の執筆ご依頼があり、大変驚いてしまいました。現在、北部地区医師会病院にて呼吸器内科医として勤務させて頂いています。昨年は愛娘にも恵まれまして、喜びとともに新しい年を迎えている所であります。

私は平成13年に琉球大学医学部を卒業後、同大学の感染病態制御学講座・分子病態感染症学分野（旧 内科学講座第一）へと入局し研

修を開始しました。3年目まで臨床研修をした後に、4年目より大学院へと進学しました。大学院時代は、感染免疫系の研究分野を選択しました。その動機としては医師になって3年目に経験させて頂いた初診のHIVの患者様の存在が大きかったと思います。それまで免疫にはリンパ球が大事で、それがHIV感染で破壊されると免疫不全状態になってAIDSを発症する、といった事は漠然とイメージ出来たのですが、HIV感染についての詳細な本を読んでいるとすぐに、ヘルパーT細胞や細胞性免疫不全など、大学生時代に聞いて正直“それよく分からんな”と思って挫折した単語が、頻回に出てきました。この程度の疾患への知識・理解度で将来、抗生剤や抗ウイルス薬などが本当に処方できるのだろうか、と不安に思いました。そこで、大学院に入ると改めて免疫系の本を読んでいく事としました。血液検査でよく提出していたCRPが、細菌感染においてオプソニン化や補体の活性化を行う事を知った時などは一人で感動していました。PCR法の原理なども核酸の模式図を絵に書いたりしながら、自分の中で本当に理解できるまで7日くらいかかったりしていました。この理解のおそさには周りの先生から笑われたりしましたが、現在臨床検査をオーダーする際に、どういった検査で、どの程度の時間がかかり、どういった部分に偽陽性、偽陰性が生じてくるという事がある程度予測出来るようになり、大変良い経験が出来たと思っています。大学院の2年生の時に研究上の都合もあり、東北大学大学院感染制御検査診断学分野の賀来 満夫教授の御教室へ2年間国内留学をさせて頂きました。そこでは以前に琉球大学内科学講座第一の助教授であられました東北大学医学部保健学科病原検査学分野の川上 和義教授のご指導の下、最終的にクリプトコッカス・ネオフォルマンスという真菌と宿主との免疫反応に関する論文で学位を頂きました。そして、指導教官でありました藤田 次郎教授のご推薦を頂いて、第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会・九州支部秋季学術講演会において奨励賞を受賞させて頂きました。

現在の呼吸器内科医としての仕事を楽しみながら行う事が出来るのは、大学院時代があったからだと思っています。何故こういった病態になるのか、どう解決すれば最善がつくせるのか、といった事を思いながら仕事にあたる事が少しずつ出来るようになってきたのではないかと思っています。今年は、疾患や病態への知識と理解をさらに深め、一つ一つの症例についてより細かな点にまで目を向ける事が出来る事を目指しています。

プライベートな目標としましては、何か体を動かす趣味を始める事が出来ればと考えています。元々どちらかといいますと出不精な性格もたたって運動不足が進行しておりまして、北部地区医師会病院の階段を2階から5階まで歩いて昇るとやや息が上がる自分を反省し、鍛え直したいと思っています。新年早々取り留めの無い文章で大変恐縮ですが、これまでお世話になりました先輩や同僚の先生方へ改めて感謝の念を持ちつつ、年始のご挨拶とさせて頂きます。本年度も何卒宜しくお願い申し上げます。

自己紹介と新年の抱負

豊見城中央病院
藤江　昌智

沖縄県医師会の皆様、あけましておめでとうございます。豊見城中央病院で2年目の研修をさせていただいている藤江昌智です。12月25日生まれですので、この原稿が掲載される頃には35歳に成り立てですが、3度目の寅年を迎えるに当たって何か抱負を、ということですので、つたない文章で恐縮ですが寄稿させていただきました。

それにしても、そんなに年月が過ぎた覚えはないのに、おかしいなあと数えてみると年数が

合うので、どうやら本当のようです。今年は初期研修が終わり、医歴3年目の節目を迎えますが、私がどのような経過で医師になったのか振り返ることで、何とか今年の抱負へと繋げていけないかと思っています。

私のふるさとは岐阜県の飛騨高山で、冬は寒くて雪深い所です。父が村で診療所の医師をしていましたので、田畑に囲まれた官舎に住んでいましたが、農家に出入りして、田植えをしたり牛の世話を手伝ったりとしているうちに、将来は農業関係の仕事に就きたいと考えるようになりました。また、父は台湾からの移民でしたので、父の台湾の親戚や友人たちがよく我が家を出入りしていて、異国の空気が漂う家でもありました。16歳の時に初めてアメリカに行って衝撃的だったのが、年下の少女が大勢の前で堂々と自分の意見を表明していたことでした。高校を卒業してすぐに神奈川県の大学に入学しましたが、ママゴトみたいな授業に飽きて退学、カナダのヴァンクーバーに渡りました。

カナダの人々は大人しげで人種差別も少なく、私にとっては居心地の良い国でしたが、経済は慢性的に悪く、一流大学を卒業しても就職口がないなど、大学卒業後の展望が見えなかったことから3年目にアメリカのカルフォルニアに移住しました。私は当時からアメリカが好きではなくて、アメリカ嫌いのカナダ人とはその点でも気が合ったのですが、実際に住んでみると、その貧富の差や人種差別の激しさに驚きました。私は農学部に在籍していたので、カウボーイの格好をした学生がクラスに多くいました。中には米を作っている人たちもいて、「日本がもっと米を買ってくれないから困る。」などと言うので、「日本に輸入米は要らない」というプレゼンをしたら、意外や喜んで聴いてくれました。今にして思えば、随分と気の良い人達でありました。

その後、縁あって南サンフランシスコにあるバイオテクノロジー関係の製薬会社に就職、2年ほど働きましたがグリーンカード取得を目前にして、日本へ帰国することに決めました。日本を離れて8年が過ぎており、適応できるか不安でしたが、日本に留学すると考えればそれも面白いと思いました。そして、東京で働いていた妹の所に居候して、勉強をしているうちに琉球大学医学部の編入学試験で拾っていただき、沖縄に住むこととなりました。

刺激を求めて海外に行った私としては、幾人かの圧倒的な人間性や経験を持つ人達に出会えたことが一番の財産となりました。彼らと出会えたことで、新しい価値観を知り得たし、人間の可能性を信じるようになりました。

また、教育についても色々考えさせられました。日本と北米では教育に対する考え方が明らかに異なるように感じましたが、ここでは割愛したいと思います。ただ、ある経済学の教授が、「学生の仕事は、to study とto complain だよ。」とおっしゃっていましたが、教育とは教師と学生の両方があって初めて成り立つもので、共に良い教育を作る義務がある、その観点においてみれば両者は対等であり、文句を言うことも、大切なフィードバックだと考えるようになりました。

最後になりましたが、新年の抱負としましては、私が出会ってきたような良い教育者になること、また良い生徒であるよう努めること、としたいと思います。それでは、確実に字数制限を超えていると思いますので筆を置かせて頂きます。皆様、どうぞ良いお年をお過ごしください。